

黒谷上人語灯録卷第十二

厭欣沙門了惠集録

和語第二之三 当卷に四篇あり。

九条殿下の北の政所へ進する御返事 第九

鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事 第十

要義問答 第十一

大胡太郎へ遣わす御返事 第十二

九条殿下の北の政所へ進する御返事 第九

念仏

畏りて申し上げせうろう。さては御念仏申させおわしましせうろうらんこそ世に嬉しくせうらえ。まことに往生の行には念仏がめでたき事にてせうろうなり。その故は弥陀の本願の行なればなり。余行はそれ真言止観の貴き行なりといえども、弥陀の本願にあらず。また念仏は釈迦如来の付属の行なり。余行はまことに定散両門のめでたき行なりといえども、釈尊これを付属したまわず。また念仏は六方の諸仏の証誠の行なり。余行は顕密事理のやんごとなき行なりといえ

ども、諸仏これを証誠したまわず。この故に様様の行多しといえども、往生の道には偏に念仏が勝れたる事にてせうろうなり。

しかるを往生の道に疎き人の申す様は、余の真言止観の行に堪えざる易きまの勤にてこそ念仏はあれと申すは、極めたる僻事にてせうろうなり。その故は余の勤をば弥陀の本願にあらざると嫌い捨てて、また釈尊の付属にあらざる行をば簡び止め、また諸仏の証誠にあらざる行をば止め收めて、今ただ弥陀の本願に任せ、釈尊の付属に依り、諸仏の証誠に随いて、愚かなる私の計をば止めて、これらの故強き念仏の行を信じ勤めて往生をば祈るべしと申す事にてせうろうなり。されば恵心の僧都の『往生要集』に「往生の業は念仏を本とす」と申したるはこの意なり。

今はただ余行を止めたまいて一向に念仏にならせたまうべし。念仏にとりても一向専修の念仏がめでたき事にてせうろうなり。その旨は三昧発得の善導和尚の『観経疏』に見えてせうろう。しかのみならず『双卷経』には「一向専念無量寿仏」と説きたまえり。およそ一向のことは二向三向に對して、偏に余の行を簡び捨て嫌い除く意なり。君達なんどの御祈の料なんども念仏がめでたき事にせうらえば、『往生要集』に余行の中にも念仏勝れたる由見えてせうろう。

また伝教大師の『七難消滅の法』にも念仏を勤むべしと見えてそうろう。およそ十方諸仏三界の天衆の擁護したまう行にてそうらえば、現世後生の御勤、何事かこれに過ぎそうらわん。今はただ一向専修の但念仏にならせたまうべくそうろう。

鎌倉の二位の禪尼へ進する御返事 第十

御文詳しく承りそうらいぬ。さては念仏の功德は仏も説き尽くし難しとのたまえり。また智慧第一の舍利弗、多聞第一の阿難も、念仏の功德は知り難しとのたまひし広大善根にてそうらえば、まして源空などは申し尽くすべくもそうらわず。源空、この朝に渡りてそうろう聖教を随分に披き見そうらえども、浄土の教文はこの朝に渡らずと考えそうらいて、僅かに震旦より取り渡してそうろう聖教の心をだにも一年二年などには申し尽くすべくも覚えそうらわらず。さりながらも仰蒙りてそうらえば、申し述べそうろうべし。

まず念仏を信ぜざる人人そうらいて申しそうろうなる事は、熊谷入道、津戸三郎は無智の者なればこそ余行をばせさせずして念仏ばかりをば法然房は勧めたれと申しそうろうなる事、極まりなき僻事にてそうろう。その故は念仏の行は

もとより有智無智を簡ばす、弥陀の昔誓いたまいし本願は遍く一切のためなり。無智のためには念仏を願とし、有智のためには余行を願としたまう事なし。十方世界の衆生のためなり。有智無智、善人悪人、持戒破戒、貴きも賤きも、男も女も隔てず、もしくは仏在世の衆生、もしくは仏の滅後の衆生、もしくは釈迦の末法万年の後三宝みな失せて後の衆生まで、ただ念仏ばかりこそ現当の祈禱とはなりそうらわめ。善導和尚は弥陀の化身にて、殊に一切衆生を哀れみたまいて、一切の聖教を勧えて専修念仏を勧めたまえるも広く一切衆生のためなり。方便の时节末法に当たりて、今の教これなり。されば無智の人のみに限らず。広く弥陀の本願を憑みて遍く善導の御心に随いて、念仏の一門を勧めそうらわんに、いかでか無智の人のみに限りて有智の人を隔てて往生せさせじとはしそうらわんや。もししからば弥陀の本願にも背き善導の御心にも契うべからず。しかればこの辺に詣で来て往生の道を尋ねそうろうには、有智無智を論ぜず、偏に専修念仏を勧めそうろうなり。

さように専修念仏を申し止めんと仕る人は、前の世に念仏三昧得道の法門を聞かずして後の世にまた定めて三惡道に還るべき者の、しかるべくてさように申しそうろうなり。その故は聖教に広く見えてそうろうなり。これはすなわち

「修行しゆぎようすることあるを見ては毒心どくしんを起おこして、方便ほうべんして競きいて怨あだを生なす。かくのごときときの生しやう盲闡提もうせんたいの輩ともがらは、頓教とんぎやうを毀滅きめつして永ながく沈淪ちんりんす。大地微塵劫だいじみじんぢやくを超過ちやうとすとも、いまだ三途さんずの身みを離はなれんこと得うべからず」と説ときたまへり。この文もんの意いは、淨土じやうどを欣ねがい念仏ねんぶつを行ぎやうする人ひとを見ては毒心どくしんを起おこし、儼事げんじを巧たくみ廻めらして様よう様の方ほう便べんをなして専修念仏せんじゆねんぶつの行ぎやうを破やぶり、怨あだを生なして申もうし止とどむるにせうろうなり。かくのごとくの人ひとは生むまれてより仏法ぶつぽうの眼まなこしいて善根ぜんこんの種たねを失うしなえる闡提人せんたいにんの輩ともがらなり。この弥陀みだの名号みやうごうを称なえて長ながき生しやうじ死じを離はなれて常じやうじゆう住じゆうの極樂ごくらくに往生おうじやうすべけれども、この教きやう法ぽうを謗そしり滅ほろぼしてこの罪つみによりて永ながく三惡道さんあくどうに沈しずむ。かくのごとくの人ひとは大地微塵劫だいじみじんぢやくを過すぐれども、永ながく三途さんずの身みを離はなれん事ことあるべからずというなり。しかればすなわちさように儼事げんじを申もうさん人ひとをば却かえりて哀あわれみたまふべきなり。さほどの罪人ざいにんの申もうさんによりて専修念仏せんじゆねんぶつに懈けだ意いをなし、念仏往生ねんぶつおうじやうに疑うたがいふ審しんを致いたさん人ひとは、いかに甲斐かいなき事ことにこそせうらわめ。およそ弥陀みだに縁えん浅あく往生おうじ時じ至いたらぬ者ものは、聞きけども信しんぜず、念仏ねんぶつの者ものを見ては腹立はらだち、声こゑを聞きいては瞋いかりをなして、悪あしき事ことなり、なんど申もうすは經論きやうろんにも見みえざる事ことを申もうすなり。御心おんこころを得えさせたまいて、いかに申もうすとも御心みこころばかりは御變改ごへんかいせうろうべからず。強あがちに信しんぜざらん人ひとをば御勸おんすすめせうろうべからず。仏ほとけな威力ちから及ちびたまわらず、いかに

結縁助成

いわんや凡夫の力は及ぶまじくそうろう。かかる不信の衆生を思えば過去の父母兄弟親類なりと思召し召しそうらいて、慈悲を起して念仏申して極樂の上品上生に参りて、悟を開きて生死に還り入りて誹謗不信の人をも迎えんと思召すべき事にてそうろうなり。この由を御心得そうろうべきなり。

一つ、雑行の人人余の功德を修せんに、財宝をあい助成して思召すべき様は、これはこれ一向専修にて決定して往生すべき身なり、他人の遠き道を我が近き道に結縁せさせん、と思召すべきなり。その上に専修を妨げそうらわざらんは、結縁せんに過なし。

一つ、人人の、堂を造り、仏を造り、經を書き、僧を供養せんをば、よくよく心を乱らずして信を發して、かくのごとくの雑善根をも修せしめたまえ、と御勧めそうろうべし。

後世

一つ、この世の祈に念仏の心を知らずして仏神にも申し、經をも誦し書き、堂をも造らば、それも前のごとくそうろうべし。せめてはまた後世のためにせばこそそうらわめ。その要なし、と仰せそうらうべからず。専修を障うる行にもあらざりけりと思召し召しそうろうべし。

樂行往生

一つ、念仏を申す事様様の義そうらえども、ただ六字を称うるばかりに一切は

撰まりてせうろうなり。意には願を憑み、口には名号を称えて、手には数を取
 り、常に心に係くるが究めたる決定の業にてせうろうなり。念仏の行はもとより
 行住坐臥、時処諸縁を簡ばず、身口の不浄をも嫌わぬ行にてせうらえば、樂行
 往生とは申し伝えてせうろうなり。ただしその中にも心を淨くして申すをば第一
 の行と申しせうろうなり。ただ浄土を心に係れば心浄の行法にてせうろうな
 り。かように御勧めせうろうべし。さように常に申させたまわんをばとかく申す
 べき様せうらわらず。我が身もしかるべくて往生この度すべしと思召しせうろ
 うべし。ゆめゆめこの心よくよく強くならせたまうべし。

一つ、念仏の行を信ぜぬ人に遇いて論じ、またあらぬ行の人人に向かいて執
 論せうろうべからず。強ちに別解異学の人人を見ては侮り譏る事せうろうまじ。
 いよいよ重罪の人にもなさん事不便にせうろう。同じ心に極樂を欣い念仏を申
 さん人をばたとい卑賤の人なりとも父母師匠にも劣らず思召すべし。今生の財
 宝の乏しからんにも力を加えたまうべし。さりながらも少しも念仏に心を係けそ
 うらわんをばよくよく勧めたまうべくせうろう。これも弥陀如来の御宮仕と思
 召しせうろうべし。釈迦如来滅後よりこのかた次第に小智小行に罷りなりてそ
 うろう。我も我もと智慧あり顔に申す人人は過にてせうろうべし。せめては録内

の経教をだにも聞かず見ず、いかにいわんや録の外の経教を見ざる人の智慧あり顔に申すは、井の中の蛙に似たり。随分に震旦日本の聖教を取り集めて披き勘えてせうろうに、念仏を信ぜぬ人は前の世に重罪を造りて地獄に久しくありて、また地獄へ疾く還るべき人なり。たとい千仏世に出でて、念仏は全く往生の業にあらず、と教えたまうとも信ぜずべからず。これは釈迦如来より始めて恒河沙の仏の証誠したまえる事なればと思召して、御ころざし金剛よりも堅くして、一向専修は御変改せうろうべからず。もし論じ申さん人をばこれへ遣わして、立て申さん様を聞け、と仰せせうろうべし。様様の要文、書き記して参らすべくせうらえども、ただこれに過ぎせうろうまじ。また娑婆世界の人は余の浄土を欣わん事は、弓なくして天の鳥を取り、足なくして高き梢の花を折らんとせんがごとし。必ず専修念仏は現当の祈となりせうろうなり。これも経の説にてせうろうなり。また御内の人人には九品の業を人に随いて始め終り堪えせうらいぬべきように御勧めせうろうべし。あなかしこ、あなかしこ。

要義問答 第十一

まことにこの身には道心のなき事と病ばかりや嘆にてせうろうらん。世を営む

事なければ四方に馳走せず、衣食共に欠けたりといえども身命を惜しむ心切
 ならねば強ちに憂とするに及ばず。心を安くせんためにも捨てそうらうべき世に
 こそそうらうめれ。いわんや無常の悲みは目の前に満てり。いづれの月日をか終
 りの時に期せん。栄ある者も久しからず、命あるものもまた憂あり。すべて厭う
 べきは六道生死の境、欣うべきは浄土菩提なり。天上に生まれて楽しみに誇る
 といえども五衰退没の苦しみあり。人間に生まれて国王の身を受けて一天下を従
 うといえども生老病死愛別離苦怨憎会苦、一事も免るる事なし。たといこれら
 の苦なからんすら三悪道に還る恐れあり。心あらん人いかが厭わざるべき。受け
 難き人界の生を受けて遇い難き仏教に遇う。この度出離を求めさせたまえ。

問う、大方さこそ思ふ事にてそうらえども、かように仰せらるることばにつき
 て左右なく出家をしたりとも、心に名利を離れたる事もなく、無道心にて人に
 謗をなされん事いかがと覚えそうらう。在家にありて多くの輪廻の業を増さんよ
 りは善き事にてやそうらうべき。

答う、戯れに尼の衣を着、酒に酔いて出家をしたる人、みな仏道の因となり
 きと旧きものにも書き伝えられてそうらう。『往生十因』と申す文には、勝如
 聖人の父母、ともに出家せし時、夫は年四十一、妻は三十三なり。修行の僧

をもて師としき。師、誉めていわく。「衰老にも至らず、病患にも臨まず、今出家を求む。これ最上の善根なり」とこそはいいけれ。釈迦如来、当来導師の慈尊に付属したまうにも「破戒重悪の輩なり」といとも、頭を剃り衣を染め袈裟を掛けたらん者をばみな汝に付く」とこそは仰せられてそうらえ。されば破戒なりといえども、三会得脱なお憑あり。ある『経』の文には「在家の持戒には出家の破戒は勝れたり」とこそは申してそうらえ。まことに仏法流布の世に生まれ出て離の道を知りて解脫幢相の衣を肩に掛け釈氏に連なりて仏法修行せざらんは、まことに宝の山に入りて手を空しくして還る例なり。

問う、まことに出家などしてはさすがに生死を離れ菩提に至らん事をこそは営みそうらえ。いかやうにか勤めいかやうにか願ひそうらうべき。

答う、『安樂集』にいわく「大乘聖教によるに二種の勝法あり。一つには聖道、二つには往生浄土なり」。穢土の中にしてやがて仏果を求むるはみな聖道門なり。諸法の実相を觀じて証を得んとし、法華三昧を行じて六根清浄を求め、三密の行法を凝らして即身に成仏せんと思ひ、あるいは四道果を求め、また三明六通を願う、これみな難行道なり。往生浄土門というはまづ浄土へ生まれて彼にて悟をも開き、仏にも成らんとするなり。これは易行道という。

生死を離るる道道多し。いづれよりも入らせたまえ。

問う、これは我らがごときの愚かなる者は浄土の往生を願ひさうらうべきか、いかん。

答う、『安樂集』にいわく「聖道の一種は今の時には証し難し。一つには大聖を去ること遙かに遠きによる。一つには理は深くして解は微きによる。この故に『大集 月藏經』にいわく、我が末法の時の中の億億の衆生、行を起し道を修するにいま一人も得る者はあらず。まさに今末法五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。ここをもて諸仏の大悲、浄土に帰せよと勧めたまう。一形悪を造れどもただよく意を繋けて精を専らにして常によく念仏せよ。一切の諸の障自然に除りて、定めて往生を得。なんぞ思い量らずして去る心なきや」といへり。永観のいわく「真言止観は理奥くして悟り難く、三論法相は道幽かにして迷ひ易し」なんどさうらう。まことに観念にも堪えず、行法にも至らざらん人は浄土の往生を遂げて一切の法門をも易く解らせたまわんは善くさうらいなんと覚えさうらう。

問う、十方に浄土多し、いづれをか欣いさうらうべき。兜率の往生を願う人も多くさうらう。いかか思い定めさうらうべき。

答う、天台大師のたまわく「諸教に讚むるところ多く弥陀にあり。故に西方を以ちて一準とす」と。また顕密の教法の中に専ら極樂を勧むる事計すべからず。恵心の『往生要集』に十方に対して西方を勧め、兜率に対して多くの勝劣を立て、難易相違の証拠どもを引けり。尋ね御覽せさせたまえ。極樂この土に縁深し。弥陀は有縁の教主なり。宿因の故、本願の故、ただ西方を欣わせたまうべきとぞ覚えそろう。

問う、まことにきては一筋に極樂を欣うべきにこそそろうなれ。極樂を欣わんにはいづれの行か勝れてそろうべき。

答う、善導釈してのたまわく「行に二種あり、一つには正行、二つには雑行」。正の中に五種あり。一つには礼拝の正行、二つには讚歎供養の正行、三つには読誦の正行、四つには称名の正行、五つには觀察の正行なり。一つに礼拝の正行といは、礼せんにはすなわちかの仏を礼して余礼を雑えざれ。二つに讚歎供養の正行といは、讚歎せんにはすなわちかの仏を讚歎供養して余の讚歎を雑えざれ。三つに読誦の正行といは、読誦せんには『弥陀經』等の三部經を讀誦して余の讀誦を雑えざれ。四つに称名の正行といは、称せんにはすなわちかの仏を称して余の称名を雑えざれ。五つに觀察の正行といは、憶念觀察せ

んにはかの土の二報莊嚴等を觀察して余の觀察を雜えされ。この五種を往生の正行とす。この正行の中にまた二つあり、一つには正、二つには助なり。称名をもては正とし、礼誦等をもては助業と名づく。この正助二行を除きて自余の修善はみな雜行と名づく。また釈していわく「自余の衆善はみな善と名づくといえども、念仏にたくらふれば全く比校にあらざ」とのたまえり。淨土を欣わせたまわば一向に念仏をこそは申させたまわめ。

問う、余行を修して往生せん事は叶いそうろうまじや。されども『法華經』に「すなわち安樂世界の阿彌陀仏の所に往く」といひ、密教の中にも決定往生の眞言あり。諸教の中に淨土に往生すべき功力を説けり。また穢土の中にして仏果に至るといふ、難き徳をだに具せらん教を修行して、易き往生極樂に廻向せば、仏果に叶うまでこそ難くとも往生は易くそうろうべきとこそ覺えそうらえ。またおのずから聴聞などに承るにも「法華念仏二つもの」と釈せられそうろうつ。並べて修せんに何か苦しうそうろうべき。

答う、『双卷經』に三輩往生の業を説きてともに「一向專念無量壽佛」とのたまえり。『觀無量壽經』に諸の往生の行を集めて説きたまうに終りに阿難に付属したまうところには「汝、この語を持て。この語を持てといは無量壽佛の名

を持つなり」と説きたまう。善導『観経』を釈してのたまうに「定散両門の益

を説くといえども、仏の本願に望むれば、一向に専ら弥陀の名号を称せしむる

にあり」という。同じき『経』の文に「一一の光明は十方世界の念仏の衆生を照

らして撰取して捨てたまわず」と説けり。善導釈してのたまわく「余の雑業の者

を照らし撰取すということをは論せず」とそうろう。余行の者はふつと生まれず

というにあらず。善導も「廻向して生まるべしといえども諸の疎雑の行と名づ

く」とこそは仰せられたれ。『往生要集』の序にも「顕密の教法、その文一つ

にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人はいまだ難しとせず。

予がごときの頑魯の者、あに容易からんや。この故に念仏の一門によりて経論

の要文を集む。これを披きこれを修するに覚り易く行じ易し」という。これらの

証、披明らめつべし。教を簡ふにはあらず、機を料らうなり。我が力にして生死を

離れん事、励み難くして、偏に他力の弥陀の本願を憑むなり。先徳たち思い量ら

てこそは道綽は聖道を捨てて浄土の門に入り、善導は雑行を止めて一向に念仏

して三昧を得たまいき。浄土宗の祖師、次第に相續けり。僅かに一両を挙げ。

この朝にも恵心、永観などいう自宗、他宗、偏に念仏の一門を勧めたまえり。

専雑二修の義初めて申すに及ばず。浄土宗の文多し、細かに御覽すべし。また

即身得道の行、往生極樂に及ばざらんやとそうろうは、まことにいわれたるよ
うにそうらえども、何にも宗と申す事のそうろうぞかし。善導の『觀經疏』に
いわく『般若經』のごときは空慧をもて宗とす。『維摩經』のごときは不思議解
脱をもて宗とす。今この『觀經』は觀仏三昧をもて宗とし、念仏三昧をもて宗と
す」というがごとき。『法華』は真如実相平等の妙理を觀じて証を取る、現身
に五品六根の位にも叶う、これらをもて宗とす。また真言には即身成仏をもて
宗とす。『法華』にも多くの功力を挙げて經を稱むるついでに即往安樂ともいい、
また即往兜率天上ともいう。これは便宜の説なり。往生を宗とするにはあらず。
真言またかくのごとし。法華念仏一つなりといいて、並べて修せよといわば、善
導和尚は『法華』『維摩』等を誦しき。浄土の一門に入りしよりこのかた一向
に念仏してあえて余の行を雜うる事なかりき。しかのみならず浄土宗の祖師、
相續いでみな一向に名号を稱して余業を雜えざれと勸む。これらを案じて專修
の一行に入らせたまへと申すなり。

問う、浄土の法門に、まず何何を見て心付きそうろうなん。

答う、經には『双卷』『觀無量壽』『小阿彌陀經』等、これを浄土三部經と
名づく。文には善導の『觀經疏』『六時禮讚』『觀念法門』、道綽の『安樂集』、

慈恩の『西方要訣』、懐感の『群疑論』、天台の『十疑論』、我が朝の大師には恵

心の『往生要集』、なんどこそは常に人の見るものにてそうらえ。ただし何を御

覧せずとも、よく御心得て念仏申させたまいなりに、往生何事か疑いそうらう

べき。

三心

問う、心をばいかようにか遣いそうらうべき。

答う、三心を具足せさせたまえ。その三心と申すは、一つには至誠心、二つ

至誠心

には深心、三つには廻向発願心なり。一つに至誠心というのは、真実の心なり。

善導釈してのたまわく「至といひは真の義、誠といひは実の義。真実の心の中に

この自他の依正二報を厭い捨てて、三業に修するところの行業に必ず真実を須

いよ。外に賢善精進の相を現じて内に虚仮を懐く者は、日夜十二時に勤め行

こと頭の火を払うがごとくにすれども、往生を得ずという。ただ内外明闇を簡

深心

ばず、真実を須いる故に至誠心と名づく。二つに深心というのは、深き信なり。

決定して深く信ぜよ、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫なり、曠劫よりこのかた

常に没み常に流転して出離の縁あることなし。また決定して深く信ぜよ、この

阿弥陀仏、四十八願をもて、衆生を撰受して疑なく慮なく、かの願力に乗り

て定めて往生すと。仰ぎ願わくは仏のことばをば信ぜよ。もし一切の智者百千万

人來たりて經論の証を引きて、一切の凡夫念仏して往生することを得ずといわんに、一念の疑退の心を起すべからず。ただ報えていふべし、汝が引くところの經論、信ぜざるにはあらず。汝が信ずるところの經論は汝が有縁の教、我が信ずるところは我が有縁の教。今引くところの經論は菩薩人天等に通じて説けり。この『觀經』等の三部は濁悪不善の凡夫のために説きたまう。しかればかの經を説きたまう時には、対機も別に、所も別に、利益も別なりき。今君が疑を聞くにいよいよ信心を増長す。もし羅漢辟支仏、初地十地の菩薩十方に満ち、化仏報仏光を輝かし、虚空に舌を吐きて生まれずとのたまわば、また報えていふべし、一仏の説は一切仏の説に同じ。釈迦如来の説きたまう教を改めば、制したまうところの殺生十惡等の罪を改めてまた犯すべしや。前の仏空事したまわば、後の仏もまた空事したまうべし。同じ事ならば、ただ為初めたる法をば改めじといいて、永く退することなかれ。かるが故に深心なり。三つに廻向発願心といは、一切の善根をことごとくみな廻向して往生極樂のためとす。決定眞実の心の中に廻向して生まるる思いをなすなり。この心深信なる事金剛のごとくにして一切の異見異学別行人等に動乱破壊せられざれ」。

「今さらに行者のために一つの譬喩を説きて外邪異見の難を防がん。人ありて

西に向いて百里千里を行くに、忽然として中路に二つの河あり。一つはこれ火の河、南にあり。二つはこれ水の河、北にあり。各闊さ百歩、深くして底なし。正に水火の中間に一つの白き道あり。闊さ四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るまで、長さ百歩。その水の波浪交過して道を湿す。火焰また来たりて道を焼く。水火相交わりて常に休息むことなし。この人すでに空曠の廻かなるところに至るに人なくして群賊悪獣あり。この人の単独行くを見て競い来たりて殺さんとす。この人、死を怖れて直に走りて西に向かう。忽然としてこの大河を見るにすなわち念言すらく。南北に辺畔なし。中間に一つの白道を見る。極めて狭小なり。二つの岸相い去ること近しいえどもいかが行くべき。今日定めて死せんこと疑なし。正しく廻らんと欲えば群賊悪獣ようやく来たりて逼む。南北に去り走らんと欲えば悪獣毒虫競い来たりて我に向かう。正に西に向かいて道を尋ねてしかも去らんと欲えば恐らくはこの二つの河に墮ちぬべし。この時惶ることいふべからず。すなわち思念すらく、廻るとも死し、また去るとも死せん。一種としても死を勉れざるものなり。我むしろこの道を尋ねて前に向かいて去らん。すでにこの道あり。必ず度るべし。この念いをなす時に、東の岸に忽ちに人の勧むる声を聞く。仁者、決定してこの道を尋ねて行け。

必ず死の難なけん。住せばすなわち死なん。西の岸の上に人ありて喚いていわく、
 汝、一心に正しく念じて道を尋ねて直に進みて疑怯退心を生さざれと。あるいは
 一分二分行くに群賊等喚いていわく、仁者、廻り来たれ。かの道は峻しく悪しき
 道なり。過ぐることを得べからず。死なんこと疑なし。我らが衆は悪心なしと。
 この人、喚ばう声をきくといえども廻顧ず、直に進みて道を念じてしかも行く
 に、須臾にすなわち西の岸に到りて永く諸の難を離る。善友、相向いて、慶喜
 已むことなし。これは喩なり。次に喩を合すといは、東の岸といは、すな
 わちこの娑婆の火宅に喩うるなり。群賊悪獸、詐り親づくといは、すなわち衆
 生の六根六識六塵五陰四大なり。人なき空廻の沢といは、すなわち悪友に随い
 て、真の善知識に値わざるなり。水火の二河といは、すなわち衆生の貪愛は水
 のごとく瞋恚は火のごとくなるに喩うるなり。中間の白道四五寸といは、衆
 生の貪瞋煩惱の中によく清淨の願往生の心を生すなり。貪瞋強きによるが故に
 すなわち水火のごとしと喩うるなり。願心微なきが故に白道のごとしと喩うる
 なり。水波常に道を湿すといは、愛心常に起りて善心を染汚するなり。また火
 焰常に道を焼くといは、瞋嫌の心よく功德の法財を焼くなり。人、道を上るに
 直に西に向かうといは、すなわち諸の行業を廻らして直に西に向かうに喩う

るなり。東の岸に人の声の勧め遣るを聞きて道を尋ねて直に西に進むというは、すなわち釈迦はすでに滅したまいて後、人見たてまつらざれども、なお教法ありて尋ねつべし。これを声のごとしと喩うるなり。あるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び廻すというは、別解別行悪見人等、妄りに見解を説きて相惑乱し、およびみずから罪を造りて退失するに喩うるなり。西の岸の上に人ありて喚ばうというは、すなわち弥陀の願の意に喩うるなり。須臾にすなわち西の岸に到りて善友相見て喜ぶというは、すなわち衆生久しく生死に沈みて曠劫に輪廻し、迷倒しみずから纏いて解脱するに由なし、仰ぎて釈迦發遣して西方に指向かわしめたまう。弥陀の悲心、招き喚ばいたまうに依りて、二尊の意に信順して水火の二河を顧す。念念に遺ることなくかの願力の道に乗じて、命を捨て已りて後かの国に生まるることを得て、仏を見たてまつりて、慶喜すること極りなからん。行者、行住坐臥の三業に修するところ、昼夜時節を問うことなく、常にこの解をなしこの想をなすが故に廻向発願心という。また廻向というは、かの国に生まれ已りて大悲を起して生死に還り入りて衆生を教化するを廻向と名づく。三心すでに具すれば行として成ぜずということなし。願行すでに成じてもし生まれずといわばこの処あることなけん。以上、善導の釈の文なり。

二尊の意

還相廻向

一心不乱

と問う、『阿弥陀経』の中に「一心不乱」とさうろうぞかしな。これ阿弥陀仏を申さん時、余事を少しも思い雑ぜさうろうまじきにや。一声念仏申さん程ものを思い雑ざらん事は容易くさうらえば、一念往生には漏るる人さうろうべしと覚えさうろう。また命の終るを期として余念なからん事は、凡夫の往生すべき事にてもさうらわず。この義いかが心得さうろうべき。

答う、善導この事を釈してのたまわく「一度三心を具足して後、乱れ破られざる事金剛のごとくにて、命畢るを期とす」るを名づけて一心というにさうろう。阿弥陀仏の本願の文に「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信樂して、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ」という。この文に至心というは『観経』に明かすところの三心の中の至誠

「観経」の三心

本願の三心

心に当たれり。信樂というは深心に当たれり。欲生我國は廻向発願心に当たれり。これを総ねて命畢るを期として乱れぬものを一心とは申すなり。この心を具せん者、もしは一日二日乃至十声一声に必ず往生することを得という。いかでか凡夫の心に散乱なき事さうらうべき。さればこそ易行道とは申す事にてさうらえ。『双卷経』の文には「横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉じ、道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし」と説けり。まことに往き易き事これに過ぎた

易往而無人

るやそうろうべき。劫を積みて生まるといわば、命も短く身も堪えざらん人いかに
 がと**思うべきに**、本願に乃至十念という、願成就の文に乃至一念もかの仏を念
 じて心を至して廻向すればすなわちかの国に生まれることを得という。造悪の者
 生まれずといわば、『觀經』の文に五逆の罪人生まると説く。もし世も下り人の心
 も愚かなる時は信心薄くして生まれ難しといわば、『双卷經』の文に「当來の世、
 經道滅尽せんに我れ慈悲をもちて哀愍して、特りこの經を留めて止住すること
 百歳ならん。それ衆生ありてこの經に値う者は、意の所願に隨いて、皆得度す
 べし」云云。その時の衆生は三寶の名を聞く事なし。諸の聖教は竜宮に隠れて
 一卷も留まるものなし。ただ邪惡無信の盛りなる衆生のみあり。みな惡道に墮ち
 ぬべし。弥陀の本願をもて、釈迦の大悲深きが故に、この教を留めたまえる事
 百年なり。いわんやこのころはこれ末法の初めなり。万年の後の衆生に劣らん
 や。かるが故に易往という。しかりといえどもこの教に値う者は難し。またおの
 ずから聞くといえども信ずる事難きが故に、しかも無人という。まことに理な
 るべし。『阿彌陀經』に「もしは一日もしは二日乃至七日、名号を執持して一
 心不乱なれば、その人命終の時に阿彌陀仏諸の聖衆と現にその人の前に在す。
 終る時心顛倒せずして阿彌陀仏の極樂國土に往生することを得」といふ。この

証明

四修

長時修

恭敬修

事を説きたまう時に釈迦一仏の所説を信ぜざらん事を恐れて、六方の如来同心時に各 広長の舌相を出だして遍く三千大千世界に覆いて、もしこのこと空事ならば、我が出だすところの広長の舌破れ爛れて口に入ることあらじと誓いたまひき。經文、釈文顯なり。また大事を成じたまいし時はみな証明ありき。『法華』を説きたまいし時は多宝一仏証明し、『般若』を説きたまいし時は四方四仏証明したまう。しかりといえども一日七日の念仏のごとく、証誠の盛なる事はなし。仏もこの事をまことに大事に思召したるにこそそうろうめれ。

問う、信心の様は承りぬ。行の次第いかがそうろうべき。

答う、四修をこそは本とする事にてそうらえ。一つには長時修乃至四つには無余修なり。一つに長時修というは、慈恩の『西方要決』にいわく「初発心よりこのかた恒に退転なきなり」。善導は「命の畢るを期として誓いて中止せざれ」という。二つに恭敬修といは「極樂の仏法僧宝において常に憶念して尊重を生ずなり」、『往生要集』にあり。また『要決』にいわく「恭敬修。これにつきて五つあり。一つには有縁の聖人を敬う。二つには有縁の聖教を敬う。三つには有縁の善知識を敬う。四つには同縁の伴を敬う。五つには三宝を敬う。一つには有縁の聖人を敬うといは、行住坐臥に西方を背かず、涕唾便痢に西方に向かわ

ざれという。二つに有縁の像と教とを敬うというは、阿弥陀仏の像を造りも画きもせよ、広くすること能わずは一仏二菩薩を作れ。また教を敬うというは、『弥陀經』等を五色の袋に盛れてみずからも読み他を教へても読ませよ。像と經と室の中に安置して六時に禮懺し、香華を供養すべし。三つに有縁の善知識を敬うというは、淨土の教を宣べん者をば、もしは千由旬よりこのかた並びに敬重し親近供養すべし。別学の者をも総じて敬う心を起すべし。もし輕慢を生さば罪を得ること窮なし。進みても衆生のために善知識となりて、必ず西方に帰することを須いよ。この火宅に住せば、退没ありて出で難きが故なり。火界の修造甚だ難かるべきが故に西方に歸せしむ。一度往生を果つれば三学自然に勝進して万行並びに具わるが故に、弥陀の淨國は造惡の地なし。四つに同縁の伴を敬うというは、同じく業を修する者なり、みずからは障重くして独業成ぜずといえども必ず良き朋に藉りてまさに行を作す。危うきを扶け危うきを濟うこと、同伴の善縁なり。深く相憑みて重くすべし。五つに三宝を敬うというは、繪像木仏、三乗の教旨、聖僧菩薩破戒の流まで、敬を起し慢を生ずることなかれ。樹の傾きたるは倒るるに曲れるに隨るがごとし。『事の礙ありて西に向かうに及ばずは、ただ西に向かう想をなすべし』。三つに無間修というは、『要決』にい

わく「常に念仏して往生の心を作せ。一切の時に於いて心に恒に想い巧むべし。譬ば、もし人、他に抄掠せられて身下賤となりて艱辛を受く。忽ちに父母を思いて本国に走り帰らんと欲う。行くべき計、いまだ弁えずして他郷にあり。日夜に思惟する苦しみ堪え忍ぶべからず。時として本国を念わずという事なし。計をなす事を得て、すでに帰りて達する事を得て、父母に親近しほしきままに欲娯するがごとし。行者もまたしかなり。往因の煩惱に善心を壊乱せられて、福智の珍財並びに散失して、久しく生死に沈みて六道に駈馳し、苦しみ身心を責む。今善縁に遇いて弥陀の慈父を聞きて、まさに仏恩を念じて、報尽を期として、心に恒に念うべし」。「心心相續して余業を聞えざれ」。四つに無余修というは、『要決』にいわく「専ら極樂を求めて礼念するなり。諸余の行業を雜起せざれ。所作の業は日別に念仏すべし」。善導ののたまわく「専らかの仏の名号を念じ、専らかの仏及びかの土の一切の聖衆等を讚めて余業を雜えざれ」。「專修のものは百はすなわち百ながら生まれ、雜修のものは百が中に希かに一二なり。雜縁に近づきぬれば、みずからも障え他の往生の正行をも障うるなり。我みずから諸方を見聞くに道俗の解行不同にして專雜異なり。ただ意を専らに作すは十はすなわち十ながら生まる。雜修の者は千が中に一つも得ず」といふ。また善導の御

弟子釈してのたまわく「西方浄土の業を修せんと欲わん者は、四修墜つることなく、三業雜わることなくして、一切の諸願諸行を廃して、ただ西方の一行一願を修せよ」とこそそうらえ。

問う、一切の善根は魔王のために妨げらる。これはいかがして対治しそうらうべき。

答う、魔界というものは衆生を誑ろかすものなり。一切の行業は自力を憑む故なり。念仏の行者は身をば罪悪生死の凡夫と思えば、自力を憑む事なくして、ただ弥陀の願力に乗りて往生せんと願うに、魔縁便を得る事なし。観慧を凝らす人にもなお九境の魔事ありという。弥陀の一事にはもとより魔事なし、果人清浄なるが故にといえり。仏を誑ろかす魔縁なければ念仏の者をば妨ぐべからず。他力を憑むによるが故なり。百丈の石を船に置きつれば万里の大海を過ぐるがごとし。また念仏の行者の前には弥陀観音常に來たりたまう。二十五の菩薩百重千重に圍繞護念したまうに便を得べからず。

問う、阿弥陀仏を念ずるにいかばかりの罪をか滅しそうらう。

答う、「一念によく八十億劫の生死の罪を滅す」といい、また「ただ仏の名に菩薩の名を聞くすら無量劫の生死の罪を除く」などと申しそうらうぞかし。

問う、念仏と申しそうろうは仏の色相を念じそうろうか。

答う、仏の色相光明を念ずるは観仏三昧なり。報身を念じ同体の仏性を観する

は、智浅く心少なき我らは境界にあらず。善導のたまわく「相を觀ぜずしてた

だ名字を稱せよ。衆生、障重くして、觀成すること難し。この故に、大聖、

憐れを垂れて稱名を専らに勸めたまえり。心微かにして、神十方に飛び散る

が故なり」といえり。また本願の文を善導釈してのたまわく「もし我れ成仏せ

んに、十方の衆生、我が国に生ぜん願じて、我が名号を稱すること下十声に至るま

で、我が願力に乗じて、もし生ぜずは正覚を取らじ。かの仏、今現に世に在して成仏

したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生稱念すれば必ず往生す

ることを得」と仰せられてそうろう。疾く疾く安樂淨土に往生せさせおはしまして弥

陀觀音を師として『法華』の真如実相平等の妙理、『般若』の第一義空、真言

の即身成仏、一切の聖教心のままに解らせおわしますべし。

云云

大胡太郎実秀へ遣わす御返事 第十二

前の便には差合う事そうらいて、御返事細かに申さずそうらいき。定めて不審に思召しそうらんとおもう。さては尋ね仰せられそうらいし

事ども、御文なんどにて容易く申し開き難き事にてせうろう。あわれ京に久しく
 御逗留せうらいし時細かに御沙汰せうらわましかば善くせうらいなまし。大方は
 念仏して往生すと申す事ばかり僅かに承りてせうろう。我が心一つに深く信
 じたるばかりにてこそせうらえども、人まで審らかに申し聞かせなんとする程の
 身にてせうらわねば、まして立ち入りたる事どもの不審なんど御文にて申し開く
 べしとも覚えせうらわねども、僅かに見及びせうらわん程の事を、憚り参らせて、
 ともかくも御返事申しせうらわざらん事の懼れにてせうらえば、心の及ぶ程は形
 のごとく申しせうらわんと存じせうろうなり。

まず三心具足して往生すと申しせうろう事は、まことにその名目ばかりを打
 聞く時にはいかなる心を申すやらんとことごとしく覚えせうらいぬべけれども、
 善導の御心にては心得易き事にてせうろうなり。必ずしも習い沙汰せざらん無
 智の人や、解なからん女人なんどのえ具せぬ程の心ばえにてはせうらわねなり。
 ただまめやかに往生せんと欲いて念仏申さん人は、自然に具足しぬべき心にてそ
 うろうものを。その故は三心と申すは『観無量寿経』に説かれてせうろう様は
 「もし衆生ありてかの国に生まれんと願わん者は、三種の心を発してすなわち往
 生すべし。何等をか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻

向發願心なり。この三心を具する者は必ずかの国に生まる」と説かれたり。

しかるに善導和尚の御意によらば、初めに至誠心というは真実の心なり。真実というは、いわく、内は虚しくして外を飾る心のなきを申すなり。すなわち『観経疏』に釈していわく「外には賢善精進の相を現じ、内には虚偽を懐くことを得ざれ」といへり。この釈の意は、内は愚かにして外には賢き人と思われんと振る舞い、内には悪を造り外には善人の由を示し、内には懈怠の心を懷きて外には精進の相を現するを、真実ならぬ心とは申すなり。外も内もありのままにて飾る心のなきを至誠心と名づくるにこそそうろうめれ。

二つに深心というは、すなわちこれ深く信ずる心なり。何事を深く信ずるぞと
いうに、まず諸の煩惱を具足し多くの罪を造りて余の善根などなからん凡夫、
阿弥陀仏の大悲本願を仰ぎてその仏の大悲の名号を称えて、もしは百年にても、
もしは四五十年にても、もしは十二十年にても、乃至一二年にてもあれ、す
べて、往生せんと思ひ始めたらん時よりして最後臨終の時に至るまで懈怠せず、も
しは七日一日十声一声にても多くも少くも称名念佛の人は決定して往生すべ
しと信じて、乃至一念も疑う心なきを深心とは申すなり。

しかるに諸の往生を願う人、本願の名号を持ちながらなお内に妄念の起るを

恐れ、外に余善の少なきによりても偏に我が身を軽しめて往生を不定に思わば、すでに本願を疑うなり。されば善導は廻かに未来の行者のこの疑を残さん事を鑑みてその疑心を除きて決定の心を勧めんがために、煩惱を具足して罪業を造り善根少なく智解なからん凡夫、十声一声までの念仏によりて決定して往生すべき理を審しく釈し教えたまえるなり。たとい多くの仏空の中に充ち満ちて光を放ち舌を舒べて「造罪の凡夫念仏して往生す」といふことは僻事なり、信ずべからず」とのたまうとも、それによりて一念も驚き疑う心あるべからず。

その故は阿弥陀仏いまだ仏に成りたまわざりし昔「もし我れ仏に成りたらん時、十方の衆生、我が名号を十たび称え一声も称えん、稱うる事上百年より下十声一声までにせんに、もし我が国に生まれずといわば我れ仏に成らじ」と誓いたまいたりしに、その願虚しからずして仏に成りてすでに久しくなりたまえり。知るべし、その名号を称えん人は必ず往生すべしといふ事を。また釈迦、この娑婆世界に出でたまいて、一切衆生のためにかの弥陀の本願を説きて念仏往生を勧めたまえり。また六方恒沙の諸仏、各広長の舌を出だして「釈迦の念仏して往生すと説きたまうは決定なり、諸の衆生深く信じて少しも疑う心あるべからず」と爾許の仏たちの一仏も残らず一味同心に証誠したまえり。すでに阿弥陀

仏はその願を立てたまう。釈迦仏はその願の虚しからざる事を説き勧めたまう。
 六方恒沙の諸仏はその説の眞実なる事を証誠したまへり。この外にいずれの仏
 のまたこれらの諸仏に違ひて、凡夫念仏して往生せず、とはのたまうべきぞとい
 う理をもて、多くのお仏現じてのたまうともそれに驚きて、さては念仏往生叶
 うまじきか、と信心を破り疑心を起すべからず。いわんや菩薩たちののたまわん
 をや、いわんや羅漢辟支等をやと釈したまいてそうろうなり。いかにいわんや
 近來の凡夫のいい妨げんをや。いかにめでたき人と申すとも善導和尚に勝りたて
 まつりて往生の道を知りたらん事も有り難くそうろう。

善導はまたただの凡夫にはあらず、すなわち阿弥陀仏の化身なり。かの仏、我
 が本願を弘めて遍く一切衆生に知らしめて決定して往生させせんりに、かりそめ
 に凡夫の人と生まれて善導和尚といわれたまうなり。いわばその教は仏説にてこ
 そそうらえ。いかにいわんや垂迹の方にも現身に念仏三昧を得て、目の当たり
 浄土の莊嚴を見、仏に向いたてまつりて直ちに仏の教えを承りてのたまえる
 ことばどもなり。本地を思うにも垂迹を訪ぬるにもかたがた仰いで信すべし。さ
 れば誰も誰も煩惱の濃き薄きを顧みず、罪障の軽き重きをも沙汰せず、ただ口に
 南無阿弥陀仏と称えん声につきて決定往生の思をなすべし。その決定の心をや

がて深心とは名づくるなり。その深心を具しぬれば決定して往生するなり。詮ずるところはともかくにも深心念仏して往生すということを深く信じて疑わぬを深心とは名づけてそうろうなり。

三つに廻向発願心というは、これまた別の心にはそうらわす。我が所修の行業を一向に極樂に廻向して往生を願う心なり。

「かくのごときの三心を具して必ず往生すべし。この心一つも少くぬれば往生せず」と善導は釈したまえるなり。たとい眞實の心ありて上を飾らずとも、仏の本願を疑わばすでに深心少けたる念仏なり。たとい疑心なくとも外を飾りて内にまことの心なくば至誠心少けたる心なるべし。たといこの二心を具して飾る心も疑心もなくとも、極樂に生まれんと思ふ心なくば廻向発願心少くぬべし。三心を心得分かつ時にはかくのごとく別別なる様なれども、詮ずるところは眞實の心を發して深く本願を信じて往生を欣う心を三心具足の心とは申すなり。まことにこれ程の心だにも具足せずしては、いかが往生程の大事をば遂げたまうべきや。この心は申せば、また易き事にてそうろうなり。これをかように心得知らねばとて、またえ具足せぬ心にてはそうらわぬなり。その名をだにも知らぬ者もこの心をば具えつべくそうろう。またよくよく知りたらん人の中にも、そのままに具

せぬもそうらいぬべき心ばえにてそうろうなり。さればこそいうに甲斐なき人とならぬ者どもの中よりも、ただひらに念仏申すばかりにて往生したりという事は昔より申し伝えたる事にてそうらえ。それらはみな知らねども三心を具したる人にてありけりと心得らるる事にてそうろうなり。また年ごろ念仏申したる人の、臨終の悪き事のそうろうは、前に申しつるようにならばかりを飾りて貴き念仏者と人にいわれんとのみ思いて、下には深く本願をも信ぜずまめやかに往生をも願わぬ人にてこそはそうろうらめと心得られそうろうなり。さればこの三心を具せざる故に臨終も悪く往生もせぬ事にてそうろうなりとしろしめすべきなり。

かく申しそうらえば、さては往生は大事の事にこそと思召す事ゆめゆめそうろうまじきなり。一定往生すべしと思ひ取らぬ心をやがて深心少けて往生せぬ心とは申しそうらえば、いよいよ一定の往生とこそ思召すべき事にてそうらえ。まめやかに往生のころさしありて弥陀の本願を疑わずして念仏を申さん人は、臨終の悪き事は大方はそうろうまじきなり。その故は仏の来迎したまう事はもとより行者の臨終正念のためにてそうろうなり。それを心得ぬ人はみな我が臨終正念にて念仏申したらん時に仏は迎えたまうべきなりとのみ心得てそうろうは、仏の願をも信ぜず経の文をも心得ぬ人にてそうろうなり。その故は『称

讀淨『土經』にいわく「仏、慈悲をもて加え祐けて心をして乱らしめたまわず」と説かれてそうらえば、ただの時によくよく申し置きたる念仏によりて臨終に必ず仏は来迎したまうべし。仏の来迎したまうを見たてまつりて、行者正念に住すと申す義にてそうろうなり。しかるに前の念仏を虚しく思いなして由なく臨終正念をのみ祈る人などのそうろうはゆゆしき僻胤に入りたる事にてそうろうなり。されば仏の本願を信ぜん人は、予ねて臨終を疑う心あるべからずこそ覚えそうらえ。ただ當時申さん念仏をばいよいよ心を至して申すべきにてそうろう。いつかは仏の本願にも臨終の時念仏申したらん人をのみ迎えんとは立てたまいてそうろう。臨終の念仏にて往生すと申す事は日ごろ往生をも願わず念仏をも申さずして、偏に罪をのみ造りたる悪人のすでに死なんとする時、初めて善知識の勧めに遇いて念仏して往生すところ『觀經』にも説かれてそうらえ。もとよりの行者は臨終の沙汰をば強ちにすべき様はそうらわぬなり。仏の来迎一定ならば臨終の正念もまた一定と思召すべきなり。この大意をもてよくよく御心を止めて心得させたまうべくそうろう。

また罪を造りたる人だにも念仏して往生す、まして『法華經』なんどうち讀みて念仏申さんは何かは苦しかるべきと人人の申しそうろうらんことは、京迎に

もさように申しそうろう人人多くそうらえば、まことにさぞそうろうらん。それは余宗の心にてこそそうろうらめ。善し悪しを定め申すべきにそうらわず。僻事と申さば恐れある方多くそうろう。ただし浄土宗の心、善導の御釈には「往生の行に大きに分ちて二つとす。一つには正行、二つには雑行なり」。始めに正行といふはこれに数多の行あり。始めに読誦正行といふは、これは『無量寿経』『観経』『阿弥陀経』等の『三部経』を読誦するなり。次に觀察正行といふは、これはかの国の依正二報のありさまを觀するなり。次に禮拜正行といふは、これは阿弥陀を禮拜するなり。次に稱名正行といふは、南無阿弥陀仏と稱うるなり。次に讚歎供養正行といふは、これは阿弥陀を讚歎したてまつるなり。これを指して五種の正行と名づく。讚歎と供養とを二つの行とする時は六種の正行とも申すなり。

この正行につきて総ねて二つとす。一つには「一心に、専ら弥陀の名号を称えたるまつりて、立居起臥昼夜に忘ることなく念念に捨てざる者を、これを正定の業と名づく、かの仏の本願に順するが故に」と申して、念仏をもて正しく定めたる往生の業と立て「もし礼誦等によるをば名づけて助業とす」と申して、念仏の外の禮拜や読誦や讚歎供養などをば、かの念仏を助くる業と申して

そろうなり。

さてこの正定業と助業とを除きてその外の諸の業をばみな雜行と名づく。

布施持戒忍辱精進等の六度万行も、『法華經』をも読み、真言をも行い、かくのごとくの諸の行をばみなことごとく雜行と名づく。前の正行を修するをば專修の行者といひ、後の雜行を修するをば、雜修の行者と申してそろうなり。

「この二行の得失を判ずるに、前の正行を修するには心常に親近して憶念間なし。後の雜行を行するには心常に間断す、廻向して生まるることを得べしといえどもすべて疎雜の行と名づく」といいて極樂に疎き行といえり。また專修の者は十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながら生まる。何をもちの故に。外の雜縁なくして正念を得るが故に、弥陀の本願と相應うが故に、釈迦の教に違わざるが故に。雜行の者は百人が中に一二人生まれ、千人が中に五人生まる。何をもちの故に。雜縁乱動して正念を失うが故に、弥陀の本願と相應せざるが故に、釈迦の教に随わざるが故に、係念相續せざるが故に、憶念間断するが故に、みずからも往生の業を障え他の往生をも障うるが故になんど釈されてそろうめれば、善導和尚を深く信じて淨土宗に入らん人は、一向に正行を修すべしと申す事にてこそそうえ。

その上は善導の教を背きて余行を加えんと欲わん人は各習いたる様どもこそ
 そうらめ。それを善し悪しとはいかが申しそうらうべき。善導の御心にて勧め
 たまえる行どもを措きながら、勧めたまわぬ行を少しにても加うべき様なしと申
 す事にてこそそうらえ。勧めたまえる正行ばかりだにもなお物憂き身にて、いまだ
 勧めたまわぬ雑行を加えん事はまことしからぬ方もそうらうぞかし。また罪を造
 る人だにも念仏して往生す、まして善なれば『法華經』なんどを読まんは何か苦
 しからんなど申しそうららんこそ無下に氣穢なく覚えそうらえ。往生を助け
 ばこそいみじくもそうらわめ。障にならぬばかりをいみじき事とて加え行わん
 事は何かは詮にてそうらうべき。されば悪をば仏の心に造れとや勧めさせたまう。
 構えて止めよとこそ誠めたまえども、凡夫の習當時の惑に引かれて悪を造るは
 力及ばぬ事にてこそそうらえ。まことに悪を造る人の様に、しかるべくて経も
 読みたく余行も加えたからん事は力及ばず。ただし『法華經』なんどを読まん
 事を一ことばなりとも悪を造らん事にいい並べて、それも苦しからねばましてこ
 れはなんど申すらん事こそ不便の事にてそうらえ。深き御法も悪しく心得る人
 に遇いぬれば、却りてものならず聞こえそうらう事こそあさましく覚えそうらえ。
 これをかように申しそうらえば、余行の人人は腹立つ事にてそうらうに、御心

一つに心得て広く散らせたまうまじくそうろう。あらぬ解の人のともかくも申しそうらわん事をば耳に聞き入れさせたまわで、ただ一筋に善導の御勸に随いて、いま少しも一定往生する念仏の数遍を申し添えんと思召すべき事にてそうろうなり。たとい往生の障とこそならずとも不定の往生とは聞きえてそうろうめれば、一定往生の正行を修すべき行の暇を容れて不定の往生の業を加えん事は、且うは損にてはそうらわずや。よくよく心得させたまうべき事にてそうろうなり。ただしかく申しそうらえば雑行を加えん人は永く往生すまじなんぞ申す事にてはそうらわず。いかさまにも余行の人なりとも、すべて人を下し人を譏る事はゆゆしき過重き事にてそうろうなり。よくよく御慎みそうらいて雑行の人なればとて悔る御心のそうろうまじくそうろうなり。よかれあしかれ人の上の善し悪しを思い容れぬがよき事にてそうろうなり。

またこころざしもとよりこの門にありて進みぬべからんをば拵え勧めさせたまうべくそうろう。解違いてあらぬさまならん人などに論じ合わせたまう事はあるまじき事にてそうろう。よくよく習い知りたまいたる聖たちだにも、さやうの事をば慎みておわしましあいてそうろうぞ。まして殿原などの御身にては一定儼事にてそうらわんずるにそうろう。ただ御身一つにまずよくよく往生を願

いて念仏ねんぶつを励はげませたまいて、位くらいたか高たかき往おう生じやうを遂とげて急いそぎ娑しゃ婆ばに還かえりて人ひとをば導みちびかせたまえ。かように審くわしく書かきつけて申もうしそろう事こともかえすがえす憚はばり思おもう事ことにてそろうなり。あなかしこ、あなかしこ。御ご披ひ露ろそろうまじくそろう。

さんがつじゅうしにち げんくう
三月十四日 源空

くろたにしようにんごとうろくかんだいじゅうさん
黒谷上人語灯録卷第十二

黒谷上人語灯録 卷第十四

厭欣沙門了惠集録

和語第二之四 当卷に九篇あり。

大胡太郎の妻室へ遣わす御返事 第十二

熊谷の入道へ遣わす御返事 第十四

津戸三郎へ遣わす御返事 第十五

黒田の聖へ遣わす御返事 第十六

越中の光明房へ遣わす御返事 第十七

正如房へ遣わす御文 第十八

禅勝房に示す御ことば 第十九

十一問答 第二十

十二箇条問答 第二十一

大胡太郎実秀が妻室のもとへ遣わす御返事 第十三

御返事 御文細かに承りそうらいぬ。まず遙かなる程に念仏の事聞こし召さんがため

に、わざと御使い上げさせたまいてさうろう念仏の御こころざしの程、かえすがえすあわれにさうろう。

さて尋ね仰せられてさうろう念仏の事は、往生極楽のためにはいずれの行なりといえども念仏に過ぎたる事はさうらわぬなり。その故は念仏はこれ弥陀の本願の行なるが故なり。

本願というは、阿弥陀仏いまだ仏に成りたまわざりし昔、法蔵菩薩と申しし古、仏の国土を浄め衆生を成就せんがために世自在王如来と申しし仏の御前にして四十八の大願を發したまいしその中に、一切衆生の往生のために一つの願を發したまえる、これを念仏往生の本願と申すなり。すなわち『無量壽經』の上巻にいわく「もし我れ仏を得たらんに、十方の衆生、至心に、信樂して、我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺を取らじ」已。善導和尚この願を釈してのたまわく「もし我れ成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称すること下十声に至るまで、もし生ぜずんば正覺を取らじ。かの仏今現に世に在して成仏したまえり。まさに知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生、称念すれば必ず往生することを得」已。

念仏というは仏の法身を憶念するにもあらず、仏の相好を觀念するにもあらず。

ただ心を至して、専ら阿弥陀仏の名号を称念する、これを念仏とは申すなり。たるが故に「称我名号」とはいふなり。

念仏の外は一切の行はこれ弥陀の本願にあらざるが故に、たとひめでたき行なりといえども念仏には及ばざるなり。大方その国に生まれんと欲わん者はその仏の誓に随うべきなり。されば弥陀の浄土に生まれんと欲わん者は弥陀の誓願に随うべきなり。本願の念仏と本願にあらざる余行と、さらにたくらぶべからず。かるが故に往生極楽のためには念仏の行に過ぎたる事はそうらわぬなりと申すなり。往生にあらざる道には余行また各掌れる方あり。しかるに衆生の生死を離るる道、仏の教様に多くそうらえども、このごろの人の三界を出で生死を離るる道はただ極楽に往生しそうらうばかりなり。この旨聖教の大きな理なり。つぎに極楽に往生するにその行様に多くそうらえども、我らが往生せん事念仏にあらずは叶い難くそうらうなり。その故は念仏はこれ仏の本願なるが故に、願力に随りて往生する事は易し。されば詮ずるところは極楽にあらずは生死を離るべからず、念仏にあらずは極楽へ生まるべからざるものなり。深くこの旨を信ぜさせたまいて一筋に極楽を願ひ、一筋に念仏して、この度必ず生死を離れんと思召すべきなり。

また一一の願の終りに「若不爾者不取正覺」と誓いたまえり。しかるに阿彌陀仏、仏に成りたまいてより已來すでに十劫を経たまえり。まさに知るべし、誓願虚しからず、みなことごとく成就したまえるなり。その中に念仏往生の願ひとり虚しかるべからず。しかれば衆生称念する者、ひとりも虚しからず、みな必ず往生する事を得。もししからずは誰か仏に成りたまえる事を信すべきや。三宝滅尽の時なりといえども一念すればなお往生す。五逆重罪の人なりといえども十念すればまた往生す。いかにいわんや三宝の世に生まれて五逆を造らざる我ら、弥陀の名号を称えんに往生疑うべからず。今この願に遇える事はまことにこれおぼろけの縁にあらず。よくよく喜び思召すべし。たといまた遇うというとももし信ぜずは遇わざるがごとし。今深くこの願を信ぜさせたまえり。往生疑い思召すべからず。必ず必ず二心なく、よくよく御念仏そうらいてこの度生死を離れ極樂に生まれさせたまうべし。

また『観無量寿経』にいわく「一一の光明、徧く十方世界を照らして、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず」^上。これは弥陀の光明ただ念仏の衆生を照らして、余の一切の行人をば照らさざうというなり。ただし余の行をしても極樂を願わば、仏の光照らして攝取したまうべし。なんぞただ念仏の者ばかりを選び

て照らしたまうや。善導和尚釈してのたまわく「弥陀の身色金山のごとし。相好の光明十方を照らす。ただ念仏のみ有りて光撰を蒙る。まさに知るべし、本願最も強しと為」^上已。念仏はこれ弥陀の本願の行なるが故に成仏の光明却りて本地の誓願を照らしたまうなり。余行はこれ本願にあらざるが故に弥陀の光明嫌いて照らしたまわざるなり。今極樂を求めん人、本願の念仏を行じて撰取の光に照らされんと思召すべし。これにつけても念仏の大切にせうろう。よくよく申させたまうべし。

また釈迦如来この『経』の中に定散の諸の行を説き已りて後に正しく阿難に付属したまう時に、上に説くところの散善の三福業、定善の十三観をば付属せずして、ただ念仏の一行を付属したまえり。『経』にいわく「仏阿難に告げたまわく、汝好くこの語を持せよ。この語を持せよとは、すなわちこれ無量寿仏の名を持せよとなり」^上已。善導和尚この文を釈してのたまわく「仏告阿難汝好持是語より已下は、正しく弥陀の名号を付属して、遑代に流通せしめたまうことを明かす。上来定散両門の益を説きたまうといえども、仏の本願に望むれば、意衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り」^上已。これは定散の諸の行は弥陀の本願にあらず。かるが故に釈迦如来の往生の行を付属したまう

に余の定善散善をば付属せずして、念仏はこれ弥陀の本願なるが故に正しく選
びて本願の行を付属したまえるなり。今釈迦の教に随いて往生を求めん者、付属
の念仏を修して釈尊の御意に契うべし。これにつきてもまたよくよく御念仏そ
うらいて仏の付属に契わせたまうべし。

また六方恒沙の諸仏舌を舒べて三千大千世界に覆いて「専らただ弥陀の名号
を称えて往生すというはこれ真実なり」と証誠したまうなり。これまた念仏は
弥陀の本願なる故に六方恒沙の諸仏これを証誠したまうなり。余の行は本願に
あらざるが故に諸仏も証誠したまわざるなり。これにつけてもまたよくよく御
念仏せさせたまいて六方の諸仏の護念を蒙らせたまうべし。弥陀の本願、釈尊
の付属、六方の護念、一一に虚しからず。この故に念仏の行は諸行には勝れたる
なり。

また善導和尚はこれ弥陀の化身なり。浄土の祖師多しといえどもただ偏えに
善導に依る。往生の行多しといえども大きに分かちて二つとしたまえり。一つ
には専修、いわゆる念仏なり。二つには雑修、いわゆる一切の諸の行なり。上
にいとところの定散等これなり。『往生礼讚』にいわく「もし能く上のごとく
念念相續して畢命を期とする者は、十はすなわち十生じ、百はすなわち百生ず、

何を以ての故に。外の雑縁なく正念を得るが故に、仏の本願と相應するが故に、
教に違わざるが故に、仏語に随順するが故なり。もし專を捨て雑業を修せんと欲
する者は、百時希に一二を得、千時希に五三を得。何を以ての故に。雑縁乱動
して正念を失うに由るが故に、仏の本願と相應せざるが故に、教と相違するが
故に、仏語に順ぜざるが故に、係念相續せざるが故に、憶想間斷するが故に「文。
これは專修と雜行との得失なり。得というは往生する事を得。いわく念仏する者
は十人はすなわち十人ながら往生し、百人はすなわち百人ながら往生すとい
う、これなり。失というはいわく往生の益を失えるなり。雜修のものは百人が
中に希に一二人往生する事を得てその余は生まれず、千人が中に希に五三人生ま
れてその余はまた生まれず。專修の者のみみな生まれることを得るは何の故ぞ。
阿彌陀仏の本願に相應せるが故なり、釈迦如来の教に随順せるが故なり。雜業の
者の生まれる事少なきは何の故ぞ。弥陀の本願に違えるが故なり、釈迦の教えに
随わざるが故なり。念仏して淨土を求むる者は二尊の御意に深く契えり。雜を
修して淨土を求むる者は二仏の御意に背けり。善導和尚二行の得失を判ぜる事
これのみにあらず。『觀經疏』と申す文の中に多くの得失を挙げたり。繁きが
故に出ださず。これをもて知りぬべし。

およそこの念仏は、誘る者は地獄に墮ちて五劫苦を受くる事窮まりなし。信する者は浄土に生まれ永劫樂を受くる事窮まりなし。なおなおいよいよ信心を深くして二心なく念仏せさせたまうべし。詳しき事は御文には尽くし難くそうろう。この御使、申しそうろうべし。

正月廿八日 源空

私にいわく、この御文は正治元年己未、御使は蓮上房尊覺なり。

熊谷の入道へ遣わす御返事 第十四

御文詳しく承りそうらいぬ。かようにまめやかに大事に思召しそうろうらん、かえすがえす有難くそうろう。まことにこの度かまえて往生しなんと思召し切るべくそうろう。受け難き人身すでに受けたり、遇い難き念仏往生の法門に遇いたり。娑婆を厭う心あり、極樂を欣う心発りたり。弥陀の本願深し、往生は掌にあるたびなり。ゆめゆめ御念仏怠らず決定往生の由を存せさせたまうべくそうろう。何事も留めそうらいぬ。

九月十六日 源空

津戸の三郎入道へ遣わす御返事 第十五

御返事

しそろう。

有智無智を論ぜ
ず

御文詳しく承り、りそうらいぬ。また尋ね仰せられて、しそろう事ども大様記し申

ひとつ、熊谷入道、津戸三郎は無智の者なればこそ、但念仏をば勧めたれ、有智

の人には必ずしも念仏には限るべからずと申す由聞こえて、しそろうらん、極めた

る僻事にて、しそろう。その故は念仏の行はもとより有智無智に限らず、弥陀の昔

誓いたまいし本願も、遍く一切衆生のためなり。無智のためには念仏を願じ、有智の

ためには余の深き行を願じたまう事なし。十方衆生の句に、広く有智無智、有罪無

罪、善人悪人、持戒破戒、賢愚、男女、もしは仏の在世の衆生、もしは仏の滅後

のこのごろの衆生、もしは釈迦の末法万年の後三寶みな失せての終りの衆生まで

もみなこもれるなり。また善導和尚、弥陀の化身として、専修念仏を勧めたまえる

も、広く一切衆生のために、勧めて無智の人にのみ限る事は、しそらわす。弘き弥陀

の本願を憑み、遍き善導の勧めを、弘めん者、いかでか無智の人に限りて、有智の人

を隔てんや。もししからは、弥陀の本願にも、背き善導の御意にも、契うべからず。さ

れば、この辺に詣で来て、往生の道を問ひ尋ね、しそろう人には、有智無智を論ぜず、

みな念仏の行ばかりを申しそろうなり。

しかるに虚言を構えてきように念仏を申し止めんとする者は前の世に念仏三昧浄土の法門を聞かず、後の世にまた三悪道に還るべき者のきよき事の事をば巧み申しそろう事にてそろうなり。その由聖教に見えてそろうなり。

「修行することあるを見ては瞋毒を起し、方便破壊して競いて怨を生ず。

かくのごときの生盲闍提の輩、頓教を毀滅して永く沈淪せん。

大地微塵劫を超過すとも、いまだ三途の身を離るることを得べからず」

と申したるなり。この文の意は、浄土を欣い念仏を行ずる者を見ては瞋を起し毒心を深くして、計を廻らし様様の方便をなして念仏の行を破り争いて怨を生

しこれを止めんとするなり。かくのごときの人には生まれてよりこのかた仏法の眼

しいて仏の種を失える闍提の輩なり。この弥陀の名号を称えて永き生死を忽

ちに截り常住の極樂に往生すという頓教の御法を誇り滅ぼして、この罪により

て永く三悪道に沈むといえるなり。かくのごときの人には大地微塵劫を過ぐとも、

永く三悪道の身を離るる事を得べからずといえるなり。

さればさように虚言を巧みて申しそろうらん人は却りて哀れむべき者なり。

さほどの者の申さんによりて念仏に疑をなし不審を起さん者は、いうに足らぬ

程ほどの事ことにてこそはそうらわめ。大方おおかた弥陀だいたに縁えん浅あさく往生おうちように時とき至いたらぬ者ものは聞きけども信しん

ぜず、行おこなうを見ては腹はらを立て怒いかりを含ふくみて障さまたげんとする事ことにてそうらうなり。そ

の心こころを得えて、いかに人ひと申まうすとも御ご心しんばかりは搖ゆるがせたまうべからず。強あながちに信しん

ぜざらんは仏ほとけなお力ちから及およびたまうまじ。いかにいわんや凡ぼん夫ぶは力ちから及およぶまじき事ことな

り。かかる不ふ信しんの衆しゆ生じやうのために慈じ悲ひを起おこし利り益いせんと思おもわんにつけても、疾とく極ごく

樂うへ参まいりて悟さとりひらきひらきひらきて生しやう死じに還かえりて誹ひ謗ぼう不ふ信しんの者ものをも度わたし、一い切い衆しゆ生じやうを遍あまねり

益やくせんと思おもうべき事ことにてそうらうなり。この由よしを心こころ得えておわしますべし。

一ひとつ、一い家けの人人ひとびとの善ぜん願がんに結け縁えん助すけ成じやうせん事こと、この条じやう左さ右ぎやうに及およばず。最ももしか

るべき事ことにそうらう。念ねん仏ぶつの行ぎやうを妨さまたぐる事ことこそ專せん修じゆの行ぎやうには制せいしたる事ことにてそ

うらえ。人ひと人びとのあるいは堂どうを造つくり、仏ほとけを造つくり、經きやうをも書かき、僧そうをも供く養やうせんには

力ちからを加くわえ縁えんを結むすばんが念ねん仏ぶつを妨さまたげ專せん修じゆを障さうる程ほどの事ことにはそうらうまじきなり。

一ひとつ、念ねん仏ぶつ申まうさせたまわんには心こころを常とねに係かけて口くちに廃わすれず称とうるがめでたき事こと

にてそうらうなり。念ねん仏ぶつの行ぎやうはもとより行ぎやう住じゆ坐ざ臥が、時じ処しよ諸しよ縁えんを嫌きらわぬ行ぎやうにてそ

らえば、たとい身みも穢きたく口くちも穢きたな

かえすがえす神しん妙みやうにそうらう。間ひまなくさように申まうさせたまわんこそかえすがえす

有あ難がたくめでたくそうらえ。いかならん処とこ、いかなる時ときなりとも、廃わすれず申まうさせた

結縁助成

時処諸縁を簡ばす

まわば往生の業に必ずなりそうらわんずるなり。この心なからん人には教えさせたまうべし。いかならん時にも申されざらんをこそ念じて申さばやと思ふべきに、申されんを念じて申させたまわぬ事はいかでかそうらうべき。ゆめゆめそうらうまじ。ただいかなる折にも嫌わず申させたまうべし。

一つ、念仏の行、強ちに信ぜざらん人に論じ合ひ、またあらぬ行、異解の人に向かいていたく強いて仰せらるる事そうらうまじくそうらう。異解異学の人を見てはこれを恭敬して軽しめ侮る事なかれと申したる事にてそうらうなり。されば同じ心に極樂を願ひ念仏を申さん人には、たとひ塵刹の外の人なりとも同行の思いをなして一仏浄、土に生まれんと欲うべき事にてそうらうなり。阿弥陀仏に縁なく極樂浄土に契、少なくそうらわん人の信も起らず願わしくもなくそうらわんには力及はず。ただ心に任せていかならん行をもして後生助かりて三悪道を離るべき事を人の心に随いて勧めたまうべきなり。またさはそうらえども塵ばかりも叶いぬべからん人には阿弥陀仏を勧め極樂を願わすべきなり。いかに申すともこの世の人の極樂に生まれて生死を離れん事、念仏ならで極樂に生まるる事はそうらうまじき事にてそうらうなり。この間の事をば人の心に随いて計らうべきにてそうらうなり。いかさまにも物を争う事はゆめゆめそうらうまじき事に

そろう。もしは誇りもしは信ぜざらん者をば、久しく地獄にありてまた地獄へ還るべき者なりとよくよく心得て、恐がらで掩え勸むべきにてそろう。

またよもと思ひ参らせそうらえども、いかなる人申すとも念仏の御心なんどたじろき思召す事あるまじくそろう。たとひ千仏世にいでて「念仏は往生すべからず」と目の当たり教えさせたまうとも、これは釈迦弥陀より始めて恒沙の仏の証誠せさせたまう事なればと思召して、こころざしを金剛よりも堅くしてこの度必ず阿弥陀仏の御前へ参らんずると思召すべきにてそろうなり。かくのごときの事片端を申さんに御心得そらいて、我がため人のために行わせたまうべし。

九月十八日 真勸承 わる

黒田の聖人へ遣わす御文 第十六

末代の衆生を往生極楽の機に当てて見るに、行少しと疑うべからず、一念十念に足りぬべし。罪人なりとて疑うべからず、罪根深きをも嫌わず。時下れりとして疑うべからず、法滅以後の衆生なお往生すべし、いわんや近ごろをや。我が身悪しとて疑うべからず、自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといえり。

所求・所帰・去
行

信心

五難

撰取門と抑止門

弥陀の本願・釈迦の説法・諸仏の証誠

本迹一致

十方に浄土多けれども、西方を願うは十悪五逆の衆生も生まるる故なり。諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念に至るまでみずから来たりて迎えたまうが故なり。諸行の中に念仏を用いるは、かの仏の本願なるが故なり。

今弥陀の本願に乗じて往生してんには、願として成ぜずという事あるべからず。本願に乗ずる事は、ただ信心の深きによるべし。

受け難き人身を受けて、遇い難き本願に遇いて、発し難き道心を発して、離れ難き輪廻の里を離れて、生まれ難き浄土に往生せん事は、悦が中の悦なり。

罪をば十悪五逆の者なお生まると信じて小罪をも犯さじと思ふべし、罪人なお生まる、いかにいわんや善人をや。行は一念十念虚しからずと信じて無間に修すべし、一念なお生まる、いかにいわんや多念をや。

阿弥陀は不取正覚のことば成就して現にかの国に在せば、定めて命終らんとすとき来迎したまわんずらん。釈尊は善き哉や、我が教えに随いて生死を離れんとすと知見したまうらん。六方諸仏は悦ばしき哉、我らが証誠を信じて不退の浄土に往生せんとすと悦びたまうらんと。

天に仰ぎ地に伏しても悦びつつ、この度弥陀の本願に遇える事を。行住坐臥にも報ずべし、かの仏の恩徳を。頼みてもなお頼むべきは乃至十念のことば、

信じてもなお信すべきは必得往生の文なり。

越中 国光明 房へ遣わす御返事 第十七

一念往生の義

一念往生の義は京中にもほほ流布する由承るところなり。およそ言語道断の事なり。まことに殆と御問にも及ぶべからざることか。

『双卷経』の中には「乃至一念信心歓喜」といい、また善導和尚の『疏』には「上一形を尽くし下十声一声に至るまでも定めて往生することを得と信じて乃至一念も疑う心なかれ」といえる、これらの文を悪く料簡する輩のかかる大邪見に任して申しそうろうところなり。「乃至」といい「下至」といえるは、上一形を尽くすを兼ねたることばなり。しかるをこのごろの愚痴無智の輩の、多く偏に十念一念なりと執して「上尽一形」を捨つる条、無慚無愧の事なり。まことに十念一念までも仏の大悲本願なお必ず引摺したまう無上の功德なりと信じて一期不退に行すべきなり。文証多しといえどもこれを出だすに及ばず。不足言の事なり。

邪見の人

ここに彼の邪見の人この難を受けて答えていわく「我がいうところも信を一念に取りに念すべきなり。しかりといいてまた念仏すべからずとはいわず」と云云。ことばは尋常なるに似たれども心は邪見を離れず。しかる故は決定の信心をもて一念

懺悔の人

して後はまた念ずというも十悪五逆な障碍をなさず、いわんや余の小罪をやと信すべきなりという。この思いに住せん者はたとい多念すというともあに仏の御心に契わんや。いづれの経論のいかなる説ぞや。これ偏に懈怠無道心の至、不当不善の類の、縦に悪を造らんと思っている事なり。

また念ぜずはその悪かの勝因を障えてむしろ三途に墮ちざらんや。かの一生造悪の者の臨終に十念して往生するはこれ懺悔念仏の力なり。この悪義には混乱すべからず。かれは懺悔の人なり、これは邪見の人なり。なおなお不可説の事なり。

附仏法の外道

たとい精進の者なりというともこの義を聞かば必ず懈怠になりなん。まれに持戒の人ありというともこの説を信ぜばすなわち無慚になりぬべし。およそかくのごときの人には附仏法の外道なり、師子の中の虫なり。また疑うらくは天魔波旬のためにその正解を奪われたる輩の、諸の往生の人を妨げんとするか。最も怪しむべし、深く恐るべし。ことごと筆端に尽くし難し。あなかしこ、あなかしこ。

正如房の御事
正如房へ遣わす御文 第十八

正如房の御事

正如房の御事こそかえすがえすあさましくそうらえ。その後は心ならず疎きようになり参らせて、念仏の御信もいかかとゆかしく思いまいらせそうらいつれども、さしたる事もそうらわず、また申すべき便もそうらわぬようにて、思いながらなにとなく虚しく罷り過ぎそうらいつるに、ただ例ならぬ御事大事になんどばかり承りそうらわんだにも、今一度見まいらせたく終りまでの御念仏の事もおぼつかなくこそ思いまいらせそうらうべきに、まして御心に係けて常に御尋ねそうらうらんこそまことにあわれにも心苦しくも思いまいらせそうらえ。左右なく承りそうらうままに参りそうらいて見まいらせたくそうらえども、思い切りてしばし居て歩きそうらわで、念仏申しそうらわばやと思い始めたる事のそうらうを、様にこそよる事にてそうらえ。これをば退しても参るべきにてそうらうに、また思いそうらえば、詮じてはこの世の見参とてもかくてもそうらいなん屍を執する惑いにもなりそうらいぬべし。誰とても止まり果つべき身にもそうらわず。我も人もただ遅れ先立つ替り目ばかりにてこそそうらえ。その絶え間を思いそうらうも、またいつまでぞと定めなき上に、たとひ久しと申しそうらうとも

夢幻ゆめまぼろし 幾程いくほどかはそうろうべきなれば、ただかまえてかまえて同じおな仏ほとけの国くにに参まいり合あいて蓮はちすの上うえにてこの世よのいふせきをも晴はるけ、ともに過去かこの因縁いんねんをも語り、互たがいに未来みらいの化導けどうをも助たすけん事ことこそかえすがえすも詮せんにてそうろうべきと始はじめよりも申もうし置おきそうらいしが、かえすがえすも本願ほんがんを取り詰つめまいらせて一念いちねんも疑うたがう御心みこころなく十声じっしやうも南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうせば、我が身みはたといかに罪深つみぶかくとも仏ほとけの願力がんりきによりて一定いちじやう往生おうじやうするぞと思おぼし召めして、よくよく一筋ひとすじに念仏ねんぶつのそうろうべきなり。

我われらが往生おうじやうはゆめゆめ我が身みの善よし悪あしきにはよりそうろうまじ。偏ひとえに仏ほとけの御おん力ちからばかりにてそうろうべきなり。我が力ちからばかりにては、いかにめでたく貴とうとき人と申もうすとも末法まつぽうのこのごろ直ただちに淨じやうど土ちからに生なまるる程ほどの事ことは有あり難がたくぞそうろうべき。また仏ほとけの御力おんちからにてそうらわんには、いかに罪深つみぶかく愚おろかに拙つたなき身みなりともそれにはよりそうろうまじ。ただ仏ほとけの願力がんりきを信しんじ信しんぜざるにぞよりそうろうべき。されば『観無量寿経かんむりやうじゆきやう』に説とかれてそうろうは、生むまれてよりこのかた念仏ねんぶつ一遍いつべんも申もうさず、それならぬ善根ぜんこんもつやつやなくて、朝夕あさゆうもの殺ころし盗ぬすみし、かくのごときの諸もろの罪つみをのみ造つくりて年月としつきをゆけども一念いちねんも懺悔さんげの心こころもなくて明あかし暮くらしたる者の、終おわりの時ときに善知識ぜんじしきの勧すすむるに遇あひてただ一声いっしやう南無阿弥陀仏なむあみだぶつと申もうしたるによりて、五十億劫ごじゆやうおつこが間あいだし生う死しに廻めぐるべき罪つみを滅めつして、化仏菩薩けぶつぼ三尊さんそんの来迎らいごうに預あずか

りて、仏の名を称うるが故に罪滅せり、我れ来たりて汝を迎う、と讚められまいらせてすなわちかの国に往生すとせうろう。また五逆罪と申して現身に父を殺し母を殺し悪心をもて仏を殺し諸宗を破し、かくのごとく重き罪を造りて一念懺悔の心もなからん、その罪によりて無間地獄に墮ちて多くの劫を送りて苦を受くべからん者、終りの時に善知識の勸によりて南無阿弥陀仏と十声称うるに、一声に各八十億劫が間生死に廻るべき罪を滅して往生す、と説かれてせうろうめれば、さ程の罪人だにもただ十声一声の念仏にて往生はしせうらえ。まことに仏の本願の力ならではいかでかさる事せうろうべきと覚えせうろう。本願虚しからずという事はこれにても信じつべくこそせうらえ。これは正しき仏説にてせうろう。仏の御ことは一言も謬らずと申しせうらえば、ただ仰ぎても信ずべきにてせうろう。これを疑わば仏の御空事と申すにもなりぬべくせうろう。却りてはまたその罪もせうらいぬべしとこそ覚えせうらえ。深く信ぜさせたまうべくせうろう。

さて往生せさせおわしますまじき様にのみ申し聞かせまいらする人人のせうららんこそかえすがえすあさましく心苦しうせうらえ。いかなる智者めでたき人人仰せらるとも、それにな驚かせおわしましせうらうぞ。各の道にはめでた

く貴き人なりとも、解あらず行異なる人の申しそうろう事は往生浄土のため
 にはなかなかゆゆしき退縁悪知識とも申しぬべき事どもにてそうろう。ただ凡夫
 の計をば聞き容れさせおわしまさで、一筋に仏の御誓いを憑みまいらせおわし
 ますべくそうろう。解異なる人の往生いい妨げんによりて一念も疑う心あるべ
 からずという理は、善導和尚のよくよく細かに仰せられ置きたる事にてそうろ
 うなり。たとひ多くの仏空の中に充ち満ちて光を放ち舌を舒べて「悪を造りた
 る凡夫なりとも一念して必ず往生すという事は儼事ぞ、信ずべからず」とのたま
 うとも、それによりて一念も疑う心あるべからず。その故は阿弥陀仏のいまだ仏
 に成りたまわざりし昔、初めて道心を発したまひし時「我れ仏になりたらんに、
 我が名を称すること十声一声までせん者、我が国に生まれずは我れ仏に成らじ」と
 と誓いたまひたりし、その願虚しからず、すでに仏に成りたまへり。また釈迦仏
 この娑婆世界に出でて一切衆生のためにかの本願を説き、念仏往生を勧めたまへ
 り。また六方恒沙の諸仏「この念仏して一定往生すと釈迦仏の説きたまえるは
 決定なり、諸の衆生、一念も疑うべからず」、ことごとく一仏も残らずあらゆる
 諸仏みなことごとく証誠したまへり。すでに阿弥陀仏は願に立て、釈迦仏はそ
 の願を説き、六方諸仏はその説を証誠したまえる上、この外は何仏のまたこれ

らの諸仏しよぶつに違たがいて、凡夫ぼんぷ往生おうじやうせず、とはのたまうべきぞという理ことわりをもて、仏現ほとけげんじてのたまうともそれに驚おどろきて信心しんじんを破やぶり疑うたがう心こころあるべからず、いわんや菩薩ぼさつたちのたまわんをや、また辟支びやくし仏ぶつをや、と細細こまごまと善導ぜんどうは釈しゃくしたまいてそうろうなり。ましてこのごろの凡夫ぼんぷのいかに申しそうらわんによりて、実げにいかがあらんずらん、なんど不定ふじやうに思おぼしめ召めす御心みこころゆめゆめそうろうまじくそうろう。いかにめでたき人ひとと申もうすとも、善導ぜんどう和尚しやうに勝まさりて往生おうじやうの道みちを知りたらん事も難かたくそうろう。善導ぜんどうまた凡夫ぼんぷにあらず、阿彌陀あみだ仏ぶつの化身けしんなり。阿彌陀あみだ仏ぶつの我わが本願ほんがん 広ひろく衆しゆ生じやうに往生おうじやうさせせん料りやうに、仮かりに人ひとと生むまれて善導ぜんどうとは申しそうろうなり。その教おしえは申もうせば仏説ぶつせつにてこそそうらえ。あなかしこ、あなかしこ。疑うたがい思おぼしめ召めすまじきにてそうろう。

また初はじめより仏ほとけの本願ほんがんに信しんを發おこさせおわしましてそうらいし御心みこころの程ほど見みいらせそうろうに、なにしかは往生おうじやうは疑うたがい思おぼしめ召めしそうろうべき。『經きやう』に説とかれてそうろうごとく、いまだ往生おうじやうの道みちも知らぬ人ひとにとりての事ことにてそうろう。もとよりよくよく聞きこし召めしたためてその上うへ御念ねん仏功積ぶつこうつもりたる事ことにてそうらわんには、必かならずまた臨終りんじゆうの善知識ぜんじしきに遇あわせおわしまさずとも往生おうじやうは一定いちじやうさせおわしますべき事ことにてこそそうらえ。なかなかならぬ様さまなる人ひとは悪あしくそうらいなん。た

だいかならん人^{ひと}にても尼女^{あまによろぼう}房^{つね}なりとも、常に御前^{おんまへ}にそうらわん人に念仏^{ねんぶつ}申させ
 て聞かせおわしまして、御心^{みこころ}一つを強く思^{おぼしめ}召して、ただなかなか一向^{いっしょう}に凡夫^{ぼんぶ}の
 善知識^{ぜんじしき}を思^{おぼしめ}召し捨てて、^す 仏^{ほとけ}を善知識^{ぜんじしき}に憑^{たの}みまいらせさせたまうべくそうろう。も
 とより仏^{ほとけ}の来迎^{らいごう}は臨終^{りんじゅう}正念^{しょうねん}のためにてそうろうなり。それを人^{ひと}のみな臨終^{りんじゅう}正
 念^{ねん}にて念仏^{ねんぶつ}申したるに仏^{ほとけ}は迎えたまうとのみ心得^{こころえ}得てそうろうは、仏^{ほとけ}の願^{ねが}を信ぜ
 ず経^{きょう}の文^{もん}を信^{しん}ぜぬにてそうろうなり。『称讚^{しょうさん}浄土^{じょうど}経^{きょう}』には「慈悲^{じひ}をもて加え祐^{たす}
 けて心^{こころ}をして乱^{みだ}らしめたまわず」と説^とかれてそうろうなり。ただの時^{とき}によくよく
 申^{もう}し置きたる念仏^{ねんぶつ}によりて仏^{ほとけ}は来迎^{らいごう}したまう時に正念^{しょうねん}には住^{じゅう}すと申すべきにて
 そうろうなり。誰^{たれ}も仏^{ほとけ}を憑^{たの}む心^{こころ}は少^{すく}なくして由^{よし}なき凡夫^{ぼんぶ}の善知識^{ぜんじしき}を憑^{たの}み、前^{まへ}の念
 仏^{ぶつ}をば空^{むな}しく思^{おも}いなして臨終^{りんじゅう}正念^{しょうねん}をのみ析^{いの}る事^{こと}どもにてそうろうが、ゆゆしき
 僻胤^{ひがいん}の事^{こと}にてそうろうなり。これをよくよく御心^{おんこころ}得て、常^{つね}に御目^{おんめ}を塞^{ふさ}ぎ掌^{たなごころ}を
 合^あわせて御心^{みこころ}を鎮^{しず}めて思^{おぼしめ}召^ますべくそうろう。願^{ねが}わくは阿弥陀^{あみだ}仏^{ぶつ}本願^{ほんがん}謬^{あやま}たず、臨
 終^{じゅう}の時^{とき}必ず我^わが前^{まへ}に現^{げん}じて慈悲^{じひ}をもて加^{くわ}え祐^{たす}けて正念^{しょうねん}に住^{じゅう}せしめたまえと御心^{みこころ}
 にも思^{おぼしめ}召^まして、口^{くち}にも申^{もう}させたまうべくそうろう。これに過^すぎたる事^{こと}そうろう
 まじ。心^{こころ}弱^{よわ}く思^{おぼしめ}召^ます事^{こと}のそうろうまじきなり。

かように念仏^{ねんぶつ}を掻^かき籠^{こも}りて申^{もう}しそうらわんなど思^{おも}いそうろうも、偏^{ひとえ}に我が身^み

ひとつのためとのみはもとより思いそうらわず。おりしもこの御事をかく承りそうらいぬれば、今よりは一念も残さずことごとくその往生の御助になさんとこそ廻向しまいらせそうらわんずれば、かまえてかまえて思召す様に遂げさせまいらせそうらわばやとこそは深く念じまいらせそうらえ。もしこのころざしまことならばいかでかまた御助にもならでそうらうべき。憑み思召さるべきにてそうらう。

大方は申し出でそうらいし一ことばに御心を止めさせおわします事もこの世一つの事にてそうらわじと、前の世もゆかしくあわれにこそ思い知らるる事にてそうらえば、承る事はこの度まことに先立たせおわしますにても、また思わずに先立ちまいらせそうらう事になる定なきにてそうらうとも、終に一仏浄土に参り合いまいらせそうらわんは疑なく覚えそうらう。夢幻のこの世にて今一度なんど思い申しそうらう事はとてかくてもそうらいなん。これをば一筋に思召し捨てていとも深く願う御心をも増し念仏をも励ましおわしまして、彼にて待たんと思召すべくそうらう。かえすがえすもなおな往生を疑う御心そうらうまじくそうらう。

五逆十悪の重き罪造りたる悪人なお十声一声の念仏によりて往生をしそう

らわんに、まして罪造らせおわします御事は何事かそうらうべき。たといそうらうべきにても幾程の事はそうらうべき。この『経』に説かれてそうらう罪人にはいい比ぶべくやはそうらう。それにまず心を発し出家を遂げさせおわしめてめでたき御法にも縁を結び、時に随い日に随いて善根のみこそは積もらせおわします事にてそうらうらめ。その上深く決定 往生の法文を信じて一向専修の念仏に入りて一筋に弥陀の本願を憑みて久しくならせおわしめてそうらう。何事にかは一事も往生を疑い思召しそうらうべき。専修の人は百人は百人ながら、十人は十人ながら往生すと善導はのたまいてそうらえば、一人その数に漏れさせおわしますべきかはとこそ覚えそうらえ。善導をも託ち、仏の本願をも責めまいらせさせたまうべくそうらう。心弱くはゆめゆめ思召すまじくそうらう。あなかしこ、あなかしこ。

理をや申し開きそうらうと思ひそうらう程に、世に多くなりそうらいぬる。さよの折節骨なくやと覚えそうらえども、もしさすが延びたる御事にてもまたそうらうらん。え知りそうらわねば、この度申しそうらわではいつをか待ちそうらうべき。もしのどかに聞かせおわしまして一念も御心を勧むる便にやなりそうらうと思ひそうらうばかりに止め得そうらわで、これ程細かになりそうらいぬ。

機嫌きげんを知りしそうらわねば計はからい難がたくてわびしくこそそうらえ。もし無む下に弱よわくな

らせおわしましたる御事おんことにてそうらわば、これは事長ことながくそうろうべくそうろう。

要ようを取りとて伝つたえまいらせさせおわしますべくそうろう。承うけたまわりそうろうままにな

にとなくあわれに覚えおぼえそうらいて、押おし返かえしました申もうしそうろうなり。

禪勝ぜんしょう房ぼうに示しめす御おんことば 第十九

一期の念仏

阿弥陀あみだ仏ぶつは一念いちねん称となうるに一度いちどの往生おうじょうに宛あてがいて発おこしたまえる本願ほんがんなり。かるが故ゆえに十念じゅうねんは十度じゅうど生まるる功德くどくなり。一向いっこう専修せんじゆの念仏者ねんぶつしやになる日ひよりして臨りん終じゆうの時に至いたるまで申もうしたる一期いちごの念仏ねんぶつを取り集あつめて、一度いちどの往生おうじょうは必ずかならずする事ことなり。

またいわく、念仏ねんぶつ申もうす機きは生むまれつきのままにて申もうすなり。前まきの世よの仕業しわざによりて今生こんじょうの身みをば受うけたる事ことなれば、この世よにてはえ直なおし改あらためぬ事ことなり。譬たとえば女人にょの男子なんしにならばやと思おもへども、今生こんじょうの中には男子なんしにならざるがごとし。智者ちしやは智者ちしやにて申もうし、愚者ぐしやは愚者ぐしやにて申もうし、慈悲ひしや者は慈悲ひしやありて申もうし、邪見じゃけん者は邪見じゃけんながら申もうす。一切いっさいの人ひとみなかくのごとし。さればこそ阿弥陀あみだ仏ぶつは十方じつぱう衆生じゆじやうとて、広ひろく願がんをば発おこしてまします。

念仏申す機

またいわく、一念十念にて往生すといえばとて念仏を疎相に申せば信力が行を妨ぐるなり。念念不捨といえばとて一念十念を不定に思えば行が信を妨ぐるなり。かるが故に信をば一念に生まると取り行をば一形 励むべし。またいわく、一念を不定に思う者は念念の念仏ごとに不信の念仏になるなり。その故は阿弥陀仏は一念に一度の往生を宛て置きたまえる願なれば念念ごとに往生の業となるなり。

十一二の問答 第二十二

浄土宗
問いていわく、八宗九宗の外に浄土宗を立つる事自由の条かな、と余宗の人の申しせうろをばいかんが申しせうろすべき。

答う、宗の名を立つる事は仏の説にあらず。みずからこころざすところの経教につきて教うる義を解り究めて宗の名をば判ずる事なり。諸宗の習みなもてかくのごとし。今浄土宗の名を立つる事は浄土の正依経につきて往生極樂の義を解り究めておわします先達の、宗の名をば立てたまえるなり。宗の起を知らざる者のさようの事をば申しせうろなり。

問いていわく、法華真言等をば雑行には入るべからず、と人人の申しせうろ

をばいか^{こた}が答え^{こた}せ^{こた}そうろう^{こた}べき。

答^{こた}う、恵心^{えしん}先徳^{せんてく}、一代^{いちだい}聖教^{しょうぎょう}の要文^{ようもん}を集めて『往生^{おうじょう}要集^{ようしゅう}』を造りたま^{つく}える中に^{なか}十門^{じゅうもん}を立^たつ。その第九^{だいく}の往生^{おうじょう}諸業門^{しよごうもん}に法華^{ほつげ}真言^{しんごん}等の諸大乘^{しよだいじようきよう}経^{きやう}を入^いれたま^まえり。諸行^{しよぎやう}と雑行^{ざうぎやう}と、ことば異^{こと}にして意^{ごころ}同^{おな}じ。今^{いま}の難者^{なんじや}は恵心^{えしん}の先徳^{せんてく}に勝^{まさ}るべ^まからざ^まるものなり。

結縁助成

問^といていわく、余^よ仏^{ぶつ}余^よ経^{きやう}につきて善根^{ぜんこん}を修^{しゆ}せん人^{ひと}に結縁^{けちえん}助成^{じよじやう}し^しそうらわ^らん事^{こと}は雑行^{ざうぎやう}と申^{もう}し^しそうろう^しべきか。

答^{こた}う、我が心^わ彌陀^{ごころ}仏^{みだ}の本願^{ほんがん}に乗^{じやう}じ決定^{けつじやう}往生^{おうじょう}の信^{しん}を取^とる上^{うへ}には、他^たの善根^{ぜんこん}に結縁^{けちえん}助成^{じよじやう}せん事^{こと}は全^{また}く雑行^{ざうぎやう}になるべ^まからず。我が往生^{おうじょう}の助業^{じよごう}となるべきなり。他^たの善根^{ぜんこん}を随喜^{ずいき}讚歎^{さんたん}せよと積^{しやく}したま^まえるをもて心得^{ごころ}べき事^{こと}なり。

問^といていわく、極樂^{ごくらく}に九品^{くほん}の差別^{しゃべつ}のそうろう事^{こと}は阿弥^あ陀^だ仏^{ぼつ}の構^{かま}えさせたま^まえる事^{こと}にてそうろう^しやらん。

答^{こた}う、極樂^{ごくらく}の九品^{くほん}は彌陀^{みだ}の本願^{ほんがん}にあらず。四十八^{しじゅうはち}願^{がん}の中^{なか}にもなし。これは釈^{しやく}尊^{そん}の巧言^{ぎやうごん}なり。善人^{ぜんにん}悪人^{あくにん}一所^{いっしょ}に生^むまるといわば、悪業^{あくごう}の者^{もの}ども慢心^{まんしん}を起^{おこ}すべきが故^{ゆえ}に九品^{くほん}の差別^{しゃべつ}をあらせて、善人^{ぜんにん}は上品^{じやうほん}に進^{すす}み悪人^{あくにん}は下品^{げほん}に下^{くだ}ると説^ときたま^まえるなり。急ぎ^{いそ}参^{まい}りて見^みるべし。

九品

問いていわく、持戒の行者の念仏の数遍の少なくそうらわんと、破戒の行者の念仏の数遍の多くそうらわんと、往生の後の位の浅深いずれか進みそうらうべきや。

答う、居てまします畳を押えてのたまわく。この畳のあるにとりてこそ破れたるか破れざるかという事はあれ。つやつやなからん畳をば何とか論ずべき。末法の中には持戒もなく破戒もなし、ただ名字の比丘ばかりありと伝教大師の『末法灯明記』に書きたまえる上には、何と持戒破戒の沙汰をばすべきぞ。かかる平凡夫のために発したまえる本願なればとて急ぎ急ぎ名号を称すべし。

問いていわく、念仏の行者等、日別の所作において声を立てて申す人もそうろう。また心に念じて数を取る人もそうろう。いずれかよくそうらうべき。

答う、それは口にて称うるも名号、心にて念ずるも名号なれば、いずれも往生の業とはなるべし。ただし仏の本願は称名の願なるが故に声を立てて称うべきなり。この故に『経』には「声をして絶えざらしめ、十念を具足して」と説き、釈には「我が名号を称すること下十声に至るまで」とのたまえり。耳に聞こゆる程は高声、念仏に取るなり。さればとて機嫌を知らず高声なるべきにはあらず。地体は声を出さんと思ふべきなり。

問といていわく、日にち別の念ねん仏ぶつの数す遍へん、相そう続ぞくに入いる程ほどはいかんが計はからいそうろうべき。

答こたう、善ぜん導どうの御おん釈しゃくによるに、一いち万まん以上いじやうは相そう続ぞくにてそうろうべし。ただし一いち万まん遍べんをも急いそぎ申もうして、さてその日ひを暮くらさん事ことはあるべからず。一いち万まん遍べんなりとも一いち日にち一夜いちやの所しよ作さくとすべきなり。総そうじては一いち食じきの間あいだに三さん度たびばかり思おもい出いださんはよき相そう続ぞくにてあるべし。それは衆しゆ生じやうの根こん性じやう不ふ同どうなれば一いち準じゆんなるべからず。こころざしだに深ふかければ自じ然ねんに相そう続ぞくはせらるるなり。

問といていわく、『礼らい讃さん』の深じん心しんの中なかには「十じつ声しやう一いつ声しやう、必かなず往おう生じやうを得う。乃ない至し一いち念ねんも疑ぎ心しんあることなし」と釈しゃくしたまえり。また『疏しよ』の深じん心しんの中なかには「念ねん念ねんに捨すてざる、これを正しやう定じやうの業ごうと名なづく」と釈しゃくしたまえり。いずれか我わが分ぶんには思おもい定さだめそうろうべき。

答こたう、「十じつ声しやう一いつ声しやう」の釈しゃくは念ねん仏ぶつを信しんずる様よう、「念ねん念ねん不ふ捨しゃ者しや」の釈しゃくは念ねん仏ぶつを行ぎやうずる様ようなり。かるが故ゆえに信しんをば一いち念ねんに生むまると取とりて行ぎやうをば一いち形ぎやうに励はげむべし、と勸すすめたまえる釈しゃくなり。また大たい意いは「一ひとたび発ほつ心しんして已い後ご、誓ちかいてこの生しやうを畢おわるまで退たい転てんあることなく、ただ浄じやう土どを以もちて期きとす」の釈しゃくを本もととすべきなり。

問とうていわく、本ほん願がんの一いち念ねんは尋じん常じやうの機きにも臨りん終じゆうの機きにもともに通つうじそうろうべき

きか。

答う、一念の願は命約まりて一念に及ばざる機のためなり。尋常の機に通ずべくば「上尽一形」の積あるべからず。この積をもて心得るに、必ずしも一念を本願というべからず。「一念に捨てざる、これを正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるが故に」と釈したまえり。この積は数遍積もらんも本願とは聞こえたるは、ただ本願に遇う機の遅速不同なれば上尽一形下至一念と発したまえる本願なりと心得べきなり。かるが故に念仏往生の願とこそ善導は積したまえ。

自力他力

問いていわく、自力他力の事はいかんが心得せううべき。

答う、源空は殿上へ参るべき器量にてはなけれども、上より召せば二度まで参りたりき。これは我が参るべき品にてはなけれども上の御力なり。まして阿弥陀仏の御力にて称名の願に應えて来迎せさせたまわん事は何の不審かあるべき。

我が身罪重くて無智なれば、仏もいかにしてか済いたまわん、なんと思わん者はつやつや仏の願をも知らざる者なり。かかる罪人どもをやすやすと助け済わん料に発したまえる本願の名号をとなながら、塵ばかりも疑う心があるまじきなり。

「十方衆生」のことばの中に「有智無智、有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、男子女人、三宝滅尽の後の百歳までの衆生みな籠るなり。かの三宝滅尽の時の念仏者と当

時の御房達と比ぶれば、当時の御房達は仏のごとし。かの時の人の命はただ十歳なり。戒定慧の三学、ただ名をだにも聞かず。総じていうばかりなき者ども、来迎に預かるべき道理を知りながら、我が身の捨てられまいらすべき様をばいかにしてか案じ出すべき。ただ極楽の欣わしくもなく念仏の申されざらん事のみこそ往生の障にてはあるべけれ。かるが故に他力本願ともいい、超世の悲願ともいうなり。

問いていわく、至誠等の三心を具しそろうべき様をばいかんが思い定めそ
うろうべき。

答う、三心を具する事はただ別の様なし。阿弥陀仏の本願に、わが名号を称念せば必ず来迎せん、と仰せられたれば、決定して引接せられまいらせんずるぞと深く信じて心に念じ口に称するに物憂からず、すでに往生したる心地して最後一念に至るまで弛まざる者は、自然に三心は具足するなり。また在家の者どもはこれ程まで思わざれども、ただ念仏申す者は極楽に生まるなればとて、常に念仏をだにも申せば空に三心は具足するなり。さればこそいうに甲斐なき者どもの中にも神妙なる往生をばする事にてあれ。

問いていわく、臨終の一念は百年の業に勝れたりと申すは、平生の念仏の

中に臨終の一念程の念仏をば申し出しそうろうまじくそうろうやらん。

答う、三心具足の念仏は同じ事なり。その故は『観經』にいわく「三心を具する者は必ずかの国に生ず」といえり。「必」文字のある故に臨終の一念と同じ事なり。

この問答の問をば『進行集』には禪勝房の問といえり。ある文には隆寛律師の問といえり。尋ぬべし。

十二箇条の問答 第二十一

問いていわく、念仏すれば往生すべしという事耳慣れたる様にありながら、いかなる故とも知らず。かようの五障の身までも捨てられぬ事ならば細かに教えさせたまえ。

答えていわく、およそ生死を出づる行一つにあらざといえども、まず極樂に往生せんと願え。弥陀を念ぜよという事釈迦一代の教に遍く勧めたまえり。その故は弥陀の本願を發して、我が名号を念ぜん者、我が浄土に生まれずは正覚取らじ、と誓いてすでに正覚を成りたまう故に、この名号を称うる者は必ず往生するなり。臨終の時諸の聖衆とともに来たりて必ず迎接したまう故に悪業

として障うるものなく、魔縁として妨ぐる事なし。男女貴賤を簡はず、善人悪人をも分たず、心を至して弥陀を念ずるに生まれずという事なし。譬えば重き石を船に載せつれば沈むことなく万里の海を渡るがごとし。罪業の重き事は石のごとくなれども本願の船に乗りぬれば生死の海に沈むことなく必ず往生するなり。ゆめゆめ我が身の罪業によりて本願の不思議を疑わせたまうべからず。これを他力の往生とは申すなり。自力にて生死を出でんとするには煩惱悪業を断じ尽くして淨土にも参り菩提にも至ると習う。これは徒歩より険しき道を行くがごとし。

問いていわく、罪業重けれども智慧の灯をもちて煩惱の闇を払う事にてそうろうなれば、かようの愚痴の身には罪を造る事は重なれども償う事はなし。何をもてこの罪を消すべしとも覺えずそうろうは、またいかん。

答えていわく、ただ仏の御ことを信じて疑なければ、仏の御力にて往生するなり。前の譬のごとく、船に乗りぬれば目しいたる者も目明きたる者もともに行くがごとし。智慧の眼ある者も仏を念せざれば願力に契わず、愚痴の闇深き者も念仏すれば願力に乗ずるなり。念仏する者をば弥陀光明を放ちて常に照らして捨てたまわねば、悪縁に遇わずして必ず臨終に正念を得て往生するなり。さら

に我が身の智慧のありなしによりて往生の定不定をば定むべからず。ただ信心の深かるべきなり。

問いていわく、世を背きたる人は一筋に念仏すれば往生も得易き事なり。かよの身には朝にも夕にも営む事は名聞、昨日も今日も思う事は利養なり。かよの身にて申さん念仏はいかが仏の御意にも契いそうらうべきや。

答えていわく、淨摩尼珠という珠を濁れる水に投ぐれば珠の用力にてその水淨くなるがごとし。衆生の心は常に名利に染みて濁れる事かの水のごとくなれども、念仏の摩尼珠を投ぐれば心の水おのずから淨くなりて往生を得る事は念仏の力なり。我が心を鎮めこの障を除きて後念仏せよとはあらず。ただ常に念仏してその罪をば滅すべし。されば昔より在家の人多く往生したる驗幾許か多き。心の静かならざらんにつけてもよくよく仏力を憑み専ら念仏すべし。

問いていわく、念仏は数遍を申せと勧むる人もあり、また、さしもなくとも、なんど申す人もあり。いずれにか随いそうらうべき。

答えていわく、解もあり習う旨もありて申さん事は、その心の中知り難ければ定めにくし。在家の人の常に悪縁にのみ親しまれ身には数遍を申さずして、徒に日を暮らし虚しく夜を明かさん事荒涼の事にやそうらわんずらん。凡夫は縁に

したが退し易きものなればいかにもいかにも励むべき事なり。されば処処に多く念念に相続して廃れざれといえり。

問いていわく、念念に廃れざる程の事こそ我が身に叶い難く覚えそうらえ。また手には念珠を取れども心にはそぞろ事をのみ思う。この念仏は往生の業には叶い難くやそうらわんずらん。これを嫌うればこの身の往生は不定なる方もありぬべし。

答えていわく、念念に捨てざれ、と教うる事は人の程に随いて勧むる事なれば、我が身にとりて心の及び身の励まん程は心に計らわせたまうべし。また念仏の時悪業の思わるる事は一切の凡夫の癖なり。さりながらも往生のころざしありて念仏せばゆめゆめ障とはなるべからず。譬えば親子の約束をなす人いささか背く心あれども、前の約束更改する程の心なければ同じ親子なるがごとし。念仏して往生せんところざして念仏を行ずるに、凡夫なるが故に貪瞋の煩惱起るといへども、念仏往生の約束を翻さざれば必ず往生するなり。

問いていわく、これ程に易く往生せば念仏する程の人はみな往生すべきに、願う者も多く念ずる者も多き中に、往生する者の希なるは何の故とか思いそうろうべき。

答えていわく、人の心は外に現るる事なければその邪正定め難しといへども、『經』には三心を具して往生すと見えてそうろうめり。この心を具せざるが故に念仏すれども往生を得ざるなり。三心と申すは、一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。始めに至誠心というのは真実心なりと釈するは内外調れる心なり。何事をするにもまことしき心なくては成ずる事なし。人なみなみの心もちて穢土の厭わしからぬを厭う由をし、淨土の欣わしからぬを欣う気色をして、内外調らぬを嫌いてまことのころざしをもて穢土をも厭い淨土をも欣えと教うるなり。次に深心というは仏の本願を信する心なり。我は悪業煩惱の身なれども仏の願力にて必ず往生するなりという道理を聞きて、深く信じて露塵ばかりも疑わぬ心なり。人多く妨げんとして、これを憎みこれを遮れどもこれによりて心の動かざるを深き信とは申すなり。次に廻向発願心というは我が修するところの行を廻向して極樂に生まれんと願う心なり。我が行の力我が心のいみじくて往生すべしとは思わず。仏の願力のいみじくおわしますすによりて生まるべくもなき者も生まるべしと信じて、命終らば仏必ず来たりて迎えたまえと思う心を、金剛の一切のものに破られざるがごとくこの心を深く信じて臨終までも徹りぬれば、十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながら生まるるなり。

さればこの心なき者は、仏を念ずれども順次の往生をば遂げず、遠縁とはなるべし。この心の発りたる事は我が身に知るべし、人は知るべからず。

問いていわく、往生を願わぬにはあらず、願うといふともその心勇猛ならず。また念仏を卑しと思うにはあらず、行じながら疎かにして明かき暮らしそうらえば、かかる身なればいかにもこの三心具したりと申すべくもなし。さればこの度の往生をば思い絶えそうらうべきにや。

答えていわく、浄土を欣えども熾しからず、念仏すれども心のゆるなることを嘆くは往生のころざしのなきにはあらず。ころざしのなき者はゆるなるをも嘆かず熾しからぬをも悲しまず。急ぐ道には足の遅きを嘆く、急がざる道にはこれを嘆かざるがごとし。また好めばおのずから発心すと申す事もあれば、漸漸に進んで必ず往生すべし。日ごろ十悪五逆を造れる者も臨終に初めて善知識に遇いて往生する事あり。いわんや往生を願ひ念仏を申して我が心の熾しからぬことを嘆かん人をば仏も哀れみ菩薩も護りて、障を除き知識に遇いて往生を得べきなり。

問いていわく、常に念仏の行者いかようにか思いそうらうべきや。
答えていわく、ある時には世間の無常なる事を思いこの世の幾程なき事を知

れ。ある時には仏の本願を思い、必ず迎えたまへと申せ。ある時には人身の受け難き理を思い、この度空しく止まん事を悲め。六道を廻るに人身を得る事は、梵天より糸を下して大海の底なる針の穴を通さんがごとしといえり。ある時は遇い難き仏法に遇えり、この度出離の業を植えずはいつをか期すべきと思うべきなり。一度悪道に墮ちぬれば阿僧祇劫を経れども三宝の御名を聞かず、いかにいわんや深く信ずる事を得んや。ある時には我が身の宿善を慶ぶべし。賢きも賤しきも人多しといえども、仏法を信じ浄土を欣う者は希なり。信ずるまでこそ難からめ、誘り憎みて悪道の因をのみ兆す。しかるにこれを信じこれを貴びて仏を憑み往生をこころぎす。これ偏に宿善のしからしむるなり。ただ今生の励にあらざ、往生の期の至れるなりと頼もしく喜ぶべし。かようの事を折に随い事によりて思うべきなり。

問いていわく、かようの愚痴の身には聖教をも見ず悪縁のみ多し。いかなる方法をもてか我が心を護り信心をも催すべきや。

答えていわく、その様一つにあらざ。あるいは人の苦に遇うを見て三途の苦を思いやれ。あるいは人の死ぬるを見て無常の理を解れ。あるいは常に念仏してその心を励ませ。あるいは常に善き友に遇いて心を恥しめられよ。人の心は多く

悪縁あくえんによりて悪あくしき心の起おこるなり。されば悪縁あくえんをば去さり善縁ぜんえんには近ちかづけといえり。これらの方法ほうほう一品ひとひんならず。時に随したがいて計はからうべし。

問といていわく、念仏ねんぶつの外ほかの余善よぜんをば往生おうじようの業ごうにあらざると修しゆすべからずといふ事ことあり。これはしかるべしや。

答こたえていわく、譬たとえば人の道みちを行ゆくに主人しゅじん一人ひとりにつきて多くの眷属けんぞくの行ゆくがごとし。往生おうじようの業ごうの中に念仏ねんぶつは主人しゅじんなり、余よの善ぜんは眷属けんぞくなり。しかりといいて余善よぜんを嫌きらうまではあるべからず。

問といていわく、本願ほんがんは悪人あくにんを嫌きらわねばとて好このみて悪業あくごうを造つくる事ことはしかるべしや。答こたえていわく、仏ほとけは悪人あくにんを捨すてたまわねども好このみて悪あくを造つくる事ことこれ仏ほとけの弟子でしにはあらず。一切いっさいの仏法ぶつぽうに悪あくを制せいせずといふ事ことなし。悪あくを制せいするに必ずしもこれを止とどめざる者は念仏ねんぶつしてその罪つみを滅めつせよと勧めたるなり。我が身の堪たえねばとて仏ほとけに科かを懸かけたてまつらん事ことは大きな謬あやまりなり。我が身の悪あくを止とどむるに能あたはずは、仏ほとけ慈悲じひを捨すてたまわずしてこの罪つみを滅めつして迎むかえたまへと申もうすべし。罪つみをばただ造つくるべしといふ事ことはすべて仏法ぶつぽうにいわざるところなり。譬たとえば人の親おやの一切いっさいの子こを悲かなむに、その中なかに良よき子こもあり、悪あくしき子こもあり。ともに慈悲じひをなすとはいえども、悪あくを行ぎやうずる子こをば目めを瞋いからし杖つえを撃きけて誠いましむるがごとし。仏ほとけの慈悲じひのあま

ねき事を聞きては罪を造れと思召すと云う解をなさば、仏の慈悲にも漏れぬべし。悪人までをも捨てたまわぬ本願と知らんにつけても、いよいよ仏の知見をば恥ずべし、悲むべし。父母の慈悲あればとて父母の前にて悪を行せんに、その父母喜ぶべしや。嘆きながら捨てず、哀れみながら憎むなり。仏もまたもてかくのごとし。

問いていわく、凡夫は心に悪を思わずと云う事なし。この悪を外に現さざるは仏を恥じずして人目を憚ると云う事あり。これは心のままに振る舞うべしや。

答えていわく、人の帰依を得んと欲して外を飾らんは過ある方もやあらん。悪を忍ばんがためにたとい心に思うとも外までは現さじと思ひて抑えん事はすなわち仏に恥ずる心なり。とにもかくにも悪を忍びて念仏の功を積むべきなり。習前よりあらざれば、臨終正念も難し。常に臨終の思ひをなして臥すごとに十念を称うべし。されば寐ても寤めても磨るる事なかれといえり。大方は世間も出世も道理は違わぬ事にてそうろうなり。心ある人は父母も哀れみ主君も育むに随いて、悪事をば退き善事をば好まんと思えり。悪をも捨てたまわぬ本願と聞かんにも、まして善人をばいかばかりか悦びたまわんと思ふべきなり。一念十念をも迎えたまうと聞かばいわんや百念千念をやと思ひて、心の及び身の励まらん

程は励むべし。さればとて我が身の器量の叶わざらんをば知らず、
仏の引接をば疑うべからず。たとひ七八十の齢を期すとも思えば夢のごとし。
いわんや老少不定なればいつを限りと思うべからず。さらに後を期する心あるべからず。
ただ一筋に念仏すべしという事、そのいわれ一つにあらず。

これを見ん折折ごとに思い出て 南無阿弥陀仏と常に称えよ

黒谷上人語灯録 卷第十四

黒谷上人語灯録卷第十五

厭欣沙門了惠集録

和語第二之五 当卷に三篇あり。

一百四十五箇条 問答 第二十二

上人と明遍との問答 第二十三

諸人伝説のことば 第二十四

一百四十五箇条 問答 第二十一

一、 供養

一つ、古き堂塔を修理してそうらわんをば供養しそうらうべきか。

答、必ず供養すべしという事もそうらわず。また供養してそうらわんも悪し

き事にもそうらわず。功德にてそうらえば、また供養せねばとて罪の得、悪しき

事にてはそうらわず。

一つ、仏の開眼と供養とは一つ事にてそうらうか。

答、開眼と供養とは別の事にてそうらうべきを同じ事にしあいてそうらうな

二、 開眼

り。開眼と申すは本体は仏師が眼を入れ開きまいらせそうろうを申しそうろうなり。

これをば事の開眼と申しそうろうなり。次に僧の仏眼の眞言をもて眼を開き大日の眞言をもて仏の一切の功德を成就しそうろうをば理の開眼と申しそうろうなり。次に供養というは仏に花香仏供御明かしなどを参らせ、さらぬ宝をも参らせそうろうを供養とは申しそうろうなり。

三、真如観

一つ、この真如観はしそうろうべき事にてそうろうか。

答う、これは恵心のと申してそうらえども、悪きものにてそうろうなり。大方真如観をば我れ衆生はえせぬことにてそうろうぞ。往生のためにも思われぬ事にてそうらえは無益にそうろう。

四、空観

一つ、またこれに計算してそうろうところは何事も空しと観ぜよと申してそうろう。空観と申しそうろうはこれにてそうろうな。されば観じそうろうべき様は譬えばこの世の事を執着して思ふまじきと教えてそうろうと見えてそうらえは、大様御覧のために参らせそうろう。

答う、これはみな理観とて叶わぬ事にてそうろうなり。僧の年ごろ習いたるだにもえせず。まして女房なんどのつやつや案内も知らざらんはいかにも叶うまじくそうろうなり。御尋ねまでも無益にそうろう。

五、七仏の名号

一つ、この七仏の名号稱うべき様とて人の給びてそうろうままに信じそうら
えば罪は失せそうろうべきか。何事もそれより仰せそうろう御事は頼しくそうら
いてかように申しそうろう。

答う、これさなくともそうらいなん。念仏にこれらの罪の失せそうろうまじく
ばこそそうらわめ。

六、師

一つ、一文の師をも疎かに申しそうらえば習いたるものの冥加なしと申しそ
うろうは、まことにてそうろうか。

七、妄念

答う、師の事は疎かならずそうろう。恩の中に深き事これに過ぎそうらわず。
一つ、心を一つにして心よく直りそうらわずとも、何事を行いそうらわずとも、
念仏ばかりにて浄土へは参りそうろうべきか。

答う、心の乱るるはこれ凡夫の習にて力及ばぬ事にてそうろう。ただ心を一
つにしてよく御念仏させたまひそうらわば、その罪を滅して往生させたまう
べきなり。その妄念よりも重き罪も念仏だにしそうらえば失せそうろうなり。

八、經の陀羅尼

一つ、經の陀羅尼は灌頂の僧に受けそうろうべきか。
答う、『法華經』のは苦しからず。灌頂の僧の受けさする陀羅尼は別の事。そ

れは思召しよるな。

九、「普賢經」

ひとつ、「普賢經」に仏の母を念ずべしと申しそうろうは。

答う、いざ覚え。

ひとつ、百日の内の赤子の不浄掛かりたるは物詣に憚ありと申したるは。

答う、百日の内の赤子の不浄苦しからず。なにも汚き物の付きてそうらわん

は汚くこそそうらえ。赤子に限るまじ。

ひとつ、念仏の百万遍百度申して必ず往生すと申してそうろうに、命短かくて

はいかがしそうろうべき。

答う、これも僻事にそうろう。百度申してもしそうろう。十念申してもしそ

うろう。また一念にてもしそうろう。

ひとつ、「阿弥陀經」十万巻読みそうろうべしと申してそうろうはいかに。

答う、これも読みつべからんにとりての事にそうろう。ただ勤を高く積みそう

らわん料にてそうろう。

ひとつ、日所作は必ず数を極めそうらわずとも読まれんに順いて読み念仏も申し

そうろうべきか。

答う、数を定めそうらわねば懈怠になりそうらえば数を定めたるがよき事に

そうろう。

一二、「阿弥陀
經」十万巻

一三、日所作の
数

一四、口臭

一つ、ひと 蕪、葱、蒜、にら 芥、き 葱、ひる 蒜、しし 芥を喰いて香失せそうらわずとも、常に念仏は申しそうらうべきやらん。

答う、念仏は何にも障らぬ事にてそうろう。

一つ、六齋に齋をしそうらわんには予ねて精進をし沃懸をし淨きものを着て

しそうろうべきか。

答う、必ずさそうらわずともそうらいなん。

一つ、一七日、二七日など服薬しそうらわんに、六齋の日に当たりてそうら

わんをばいかがしそうろうべき。

答う、それ力及ばぬ事にてそうろう。さればとて罪にてはそうろうまじ。

一つ、六齋は一生すべくそうろうか。何年すべくそうろうぞ。

答う、それも御心によるべき事にてそうろう。いくらすべしと申す事はそうら

わす。

一つ、念仏をば日所作にいくらばかり宛ててか申しそうろうべき。

答う、念仏の数は一万遍を始めにて、二万三万五万六万、乃至十万まで申し

そうろうなり。この中に御心に任せて思召しそうらわん程を申させおわします

べし。

一八、念仏の数

一七、六齋は御心

一六、六齋の服薬

一五、齋の精進

一九、『阿弥陀
經』何卷

ひとつ、『阿弥陀經』をば一日に何巻ばかり宛ててか読みそろうべき。

答う、『阿弥陀經』は誓いて一生中に十萬巻をだにも読みまいらせそらいぬれば決定して往生すと善導和尚の仰せられてそろうなり。毎日に十五巻づつ読めば二十年に十萬巻に満ちそろうなり。三十巻づつ読めば十年に満ちそろうなり。

二〇、五色の糸
は左右の手

ひとつ、五色の糸は仏には左にと仰せそらいき。我が手にはいずれの方にていかが引きそろうべき。

二一、法文の焚
焼

答う、左右の手にて引かせたまうべし。
ひとつ、仏の名をも書き貴き事をも書きてそろうを徒にせじとて焼きそろうは罪の得るに、誦文をして焼くと申しそろうはいかがそろうべき。

答う、さる反故焼きそらわんに何条の誦文かそろうべき。大方は法文をば敬う事にてそらえは、もし焼かんとせられそらわば淨きところにて焼かせたまうべし。

二二、戒和尚と
阿闍梨

ひとつ、戒受けそろう時、和尚となりたまえ、阿闍梨となりたまえ、と申す事のそろう、心得そらわらず。何という事にてそろうぞ。

答う、和尚と申しそろうは戒受くる時に法門習いたる師を申しそろうなり。

二三、齋の功德

阿闍梨あじやりと申しもうそうろうは正まさしく戒かいを授さずくる師しにてもうそうろうなり。これをかば羯磨かつま阿闍梨あじやりと申しもうそうろうなり。

一つ、齋ときしひとそうろうは功德くどくにてひとそうろうやらん。必ずかならすべき事ことにてひとそうろうやらん。

答こたう、齋ときは功德くどく得とくる事ことにてひとそうろうなり。六ろく齋さいの御時おんときぞひとさもひとそうらいぬべき。

また御大事おんだいじにて御病おんやまいなんども発おこらせおわしましぬべくひとそうらわば、さなくとも。

ただ御念仏おんねんぶつだにもよくよくひとそうらわばそれにて生しょうじ死じを離はなれ浄じようじ土どにも往おう生じようせさせ

おはしまさんずる事ことはこれによるべくひとそうろう。

一つ、臨終りんじゆうの折阿弥陀おりのみだの定じよういん印いんなんどを習ならいて引ひかえひとそうろうやらん。たださそ

うらわずとも左右さうの手てにて引ひかえひとそうろうやらん。

答こたう、必ず定じよういん印いんを結むすぶべきにてひとそうらわす。ただ合掌がっしょうを本ほん体たいにてその中なかに引ひか

えられひとそうろうべし。

一つ、近ちかくて必ずかならしも見みまいらせひとそうらわねども遠とほらかに引ひかえひとそうろうや

らん。

答こたう、遠とほくも近ちかくも便びん宜ぎによるべくひとそうろう。いかなるも苦くるしみひとそうらわす。

一つ、必ずかなら仏ほとけを見み、糸いとを引ひかえひとそうらわすとも、我われ申もうさずとも人ひとの申もうさん念ねん仏ぶつを

二四、臨終の定印

二五、来迎図

二六、臨終の念仏

聞きても死にそうらわねば浄土には往生しそうらうべきやらん。

答う、必ず糸を引くという事そうらわねず。仏に向かいまいらせねども念仏だにもすれば往生しそうらうなり。また聞きてもしそうらう。それはよくよく信心深くての事にそうらう。

一つ、永く生死を離れ三界に生まれじと思ひそうらうに、極樂の衆生となりてもまたその縁尽きぬればこの世に生まると申しそうらうはまことにてそうらうか。たとい国王ともなり、天上にも生まれよ、ただ三界を別れんと思ひそうらうに、いかに勤め行いてか還りそうらわねざるべき。

答う、これ諸の僻事にてそうらう。極樂へ一度生まれそうらいぬれば永くこの世に還る事そうらわねず。みな仏に成る事にてそうらうなり。ただし人を導かんためには故に還る事もそうらう。されども生死に廻る人にてはそうらわねず。三界を離れ極樂に往生するには念仏に過ぎたる事はそうらわねなり。よくよく御念仏のそうらうべきなり。

一つ、女房の聴聞しそうらうに戒を持たせそうらうを、破りそうらわんずればとて、持つとも申しそうらわぬはいかがそうらうべき。ただ聴聞の庭にては一時も持つと申しそうらうがめでたき事と申しそうらうはまことにてそうらうか。

二九、仏の箔

三〇、所作

三一、卷経を畳む事

三二、仏に具する経

三三、経一卷ずつ

三四、仏に厨子を鎖す事

三五、常不輕菩薩

答う、これは苦しくそうらわず。たとい後に破れども、その時持たんと思ふ心にて持つと申すは善き事にてそうろう。

一つ、仏の薄を押してまた供養しそうろうか。

答う、さそうらわずとも。

一つ、所作を欠きて人に仕入れさせそうろうはいかががそうろうべき。

答う、さなくともそうらいなん。

一つ、卷経を草子に畳むは罪と申しそうろうはいかががそうろうべき。

答う、罪得ぬ事にてそうろう。

一つ、仏に具する経を取放ちて人にも給ぶは罪にてそうろうか。

答う、弘むるは功德にてそうろう。

一つ、一部とある経一卷ずつ取放ちて読まんは罪にてそうろうか。

答う、罪にてもそうらわず。

一つ、仏に厨子を鎖して据えまいらせては供養すべくそうろうか。

答う、一切あるまじ。

一つ、不軽を拜む事しそうろうべきか。

答う、このごろの人のえ心得ぬ事にてそうろうなり。

三六、仏教には
忌なし

三七、仏に膠を
具す事

三八、尼の服薬

三九、父母の前
に死ぬ事

四〇、生きて造
る功德

四一、人の護

四二、誑惑に物
呉るる事

四三、ただ読む

ひとつ、七歳の子、死にて忌なしと申しそうろうはいかに。

答う、仏教には忌という事なし。世俗に申したらんように。

ひとつ、仏に膠を具しそうろうが汚くそうろう。いかがしそうろうべき。

答う、まことに汚けれども具せでは叶うまじければ。

ひとつ、尼の服薬しそうろうは悪くそうろうか。

答う、病に喰うは苦しからず。ただは悪し。

ひとつ、父母の前に死ぬるは罪と申しそうろうは、いかに。

答う、穢土の習、前後力なき事にてそうろう。

ひとつ、生きて造りそうろう功德はよくそうろうか。

答う、めでたし。

ひとつ、人の護を得てそうらわんは供養しそうろうべきか。

答う、せずとも苦しからず。

ひとつ、誑惑に物呉るるは罪にてそうろうか。

答う、罪にてそうろう。

ひとつ、経をして供養せずとも苦しからずそうろうか。

答う、ただ読む。

四四、經千部

ひとつ、經千部読みては供養しそうろうべきか。

答う、さもそうろうまじ。

四五、懺悔の事

ひとつ、懺悔の事、幡や花鬘など飾りそうろうべきか。

答う、さらでも。ただ一心ぞ大切にそうろう。

四六、花香

ひとつ、花香を仏に参らせそうろう事。

答う、暁は供養法に必ず参らせそうろう。ただは花瓶に挿し散らしても供養

すべし。香は必ず焚くべし。便悪くばなくとも。

四七、經を受くる事

ひとつ、經をば僧に受けそうろうべきか。

答う、我と読みつべくば僧に受けずとも。

四八、聴聞・物詣

ひとつ、聴聞、物詣は必ずしそうろうべきか。

答う、せずとも。なかなか悪くそうろう。静かにただ御念仏そうらえ。

四九、後世の事

ひとつ、神に後世申しそうろう事、いかん。

答う、仏に申すには過ぐまじ。

五〇、説経師

ひとつ、説経師は罪深くそうろうか。また妻にならん者も罪深しと申しそうろう

うは、まことにてそうろうか。

答う、本体は功德得べくそうろうに、末世のは罪得つべし。妻にならん者は罪。

五一、香を集むる事

五二、経を習う事

五三、還俗の者

五四、還俗

五五、参詣の精進

五六、歌詠む事

五七、酒飲む事

五八、魚・鳥・犬

ひとつ、麝香じやこう丁ちやうじ子こを持ちもちそうろうは罪つみにてそうろうか。

ひとつ、香かを集あつむるは罪つみ。

ひとつ、妻め、男おとこに経きやう習ならう事こといかがそうろうべき。

ひとつ、苦くるしからず。

ひとつ、還俗げんぞくの者ものに目めを見合みあわせずと申もうしそうろうはまことにてそうろうか。

ひとつ、さまで説とかず。僻事ひがごと。

ひとつ、還俗げんぞくを心こころならずしてそうらわんはいかに。

ひとつ、浅あさくや。

ひとつ、神しん仏ぶつへ参まらんまいに、三みつ日にち一いち日にちの精しやう進じんいいずれかよくそうろう。

ひとつ、信しんを本もとにす。幾いく日にちと本説ほんせつなし。三みつ日にちこそよくそうらわめ。

ひとつ、歌詠うたよむは罪つみにてそうろうか。

ひとつ、強あながちに得えそうらわじ。ただし罪つみも得え、功徳くどくにもなる。

ひとつ、酒飲さけのむは罪つみにてそうろうか。

ひとつ、まことには飲のむのべくもなければ、この世よの習ならい。

ひとつ、魚鳥いおとり犬しは、変かわりかわらうらうか。

ひとつ、ただ同おなじ事こと。

五九、百日精進

ひとつ、あま尼になりて百日精進はよくそうろうか。
こた答う、よし。

六〇、経は必ず具すか

ひとつ、ほとけつく仏造りて、きやう経は必ず具しそうろうべきか。
こた答う、必ず具すべしともそうらわらず。また具してもよし。

六一、功德は身の堪うる程

ひとつ、くじやく功德は身の堪うる程と申しそうろうはまことにてそうろうか。

六二、経と仏

こた答う、さた沙汰に及びそうらわらず。ちから力の堪うる程。
ひとつ、きやう経とぼとけ仏と必ず一度に据えそうろうか。
こた答う、さもそうらわらず。ひとつづつも。

六三、錫杖の誦文

ひとつ、しゃくじやう錫杖は必ず誦すべきか。
こた答う、さなくとも。その暇に念仏一遍も申すべし。あまほうし尼法師こそ歩く時虫のため
に誦しそうらえ。

六四、誕生日

ひとつ、いみ忌の日物詣しそうろうはいかに。
こた答う、苦しからず。ほんみやう本命日も。

六五、滅罪

ひとつ、ご五逆十悪、いちねんじゅうねん一念十念に滅びそうろうか。
こた答う、疑いなくそうろう。

六六、日ごろの念仏

ひとつ、りんじゆう臨終に善知識に遇いそうらわすとも、ひ日ごろの念仏にておうじやう往生はしそうろう

うべきか。

答う、善知識ぜんじしきに遇あわずとも、臨終りんじゆう思おもうようならずとも、念仏ねんぶつ申もうさば往生おうじようすべ

し。

六七、誹謗正法

一つ、誹謗正法ひぼうしやうぽうは五逆ごぎやくの罪つみに多く増ましりと申もうしそうろうは、まことにてそうろうか。

答う、これはいと人のせぬことにてそうろう。

六八、死者の剃

一つ、死しにてそうらわん者の髪かみは剃そりそうろうべきか。

髪

答う、必ずさるまじ。

六九、妄念

一つ、心こころに妄念もうねんのいかにも思おもわれそうろうはいかがしそうろうべき。

答う、ただよくよく念仏ねんぶつを申もうさせたまえ。

七〇、臨終の物

一つ、我が料りやうの臨終りんじゆうの物ものの具ぐ、まず人に貸かしそうろうはいかがしそうろうべき。

の具

答う、苦しからず。

七一、五色の糸

一つ、五色ごしきの糸いと撚ねむこと。

撚む事

答う、幼おきなき者に撚ねます。

七二、楊枝

一つ、節ふしある楊枝ようじをば使つかわず、続つづ帯きおび、青あお帯おび、無む文もんの帯おびするは忌いむと申もうしそう

ろうは。

七三、服薬の綿

答う、苦しからず。

一つ、服薬の綿は洗いそうらわざらんはいかがそうろう。

答う、苦しからず。

一つ、よき物を着、悪きところに居て往生願いそうろうはいかがそうろう。

七四、よき物・悪きところ

答う、苦しからず。八斎戒の時こそさはそうらわめ。

七五、月の憚

一つ、月の憚の時経読みそうろういかがそうろう。

答う、苦しみあるべしと見えそうろう。

七六、仏を恨む事

一つ、申しそうろう事の叶いそうらわぬに仏を恨みそうろう。いかがそうろう。

答う、恨むべからず。縁により信のありなしによりて利生はあり。この世後の

世仏を憑むにはしからず。

一つ、蒜穴はいずれも七日にてそうろうか。また穴の干たるは忌深しと申しそ

七七、蒜・穴の忌

うろうはいかに。

答う、蒜も香失せなば憚なし。穴の干たるによりて忌深しという事は僻事。

一つ、月の憚のあいだ神の料に経は苦しきそうろうまじきか。

七八、神の料に経

答う、神や憚らん、仏法には忌まず。陰陽師に問わせたまえ。

一つ、子生みて仏神へ詣る事、百日憚と申しそうろうはまことにてそうろう

七九、出産の忌

か。

答う、それも仏法に忌まず。

一つ、『法華経』一品読み止して魚喰わずと申しそうろうはいかに。

答う、苦しからず。

一つ、数珠、掛帯掛けずして経を受けそうろう事はいかに。

答う、苦しからず。

一つ、齋に豆、小豆の御料喰わずと申しそうろうはまことにてそうろうか。

答う、苦しからず。

一つ、寐ても寤めても口洗わで念仏申しそうらわんはいかがそうろうべき。

答う、苦しからず。

一つ、信施を受くるは罪にてそうろうか。

答う、勤して喰う僧は苦しからず。せねば深し。

一つ、神の辺の物喰うは蛇と申しそうろうはいかに。

答う、称宜、神主は偏にその身になるにこそ。さらぬが少し喰わんは重からじ。

一つ、僧の物喰いそうろうも罪にてそうろうか。

答う、罪得るもそうろう、得ぬもそうろう。仏の物、奉加結縁の物喰うは罪。

八〇、『法華経』
読む事

八一、数珠・掛
帯

八二、齋の御料

八三、口洗わで
念仏

八四、信施

八五、蛇

八六、僧物

八七、大仏・天王寺

ひとつ、大仏、天王寺なんどの辺あたりに居いて僧そうの物喰ものくいて後世ごせ取とらんとしそうろう人ひとは罪つみか。

答こたう、念仏ねんぶつだに申もうさば苦くるしからず。

八八、齋の朝

ひとつ、齋ときする朝あした、御料ごりょう数多あまたに迎むかう。いかがそうろう。

答こたう、苦くるしからず。

八九、齋の早朝

ひとつ、齋ときの早朝つとめて、御衣みぞう打うつ、いかに。

答こたう、苦くるしからず。

九〇、精進幾日

ひとつ、戒かいを持ちたもちて後のち、精進しやうじん幾日いくかかしそうろう。

答こたう、幾日いくかも御心みこころ。

九一、聴聞

ひとつ、聴聞ちやうもんは功德くどくえ得とくそうろうか。

答こたう、功德くどくえ得とくそうろう。

九二、念仏者の物詣

ひとつ、念仏ねんぶつを行ぎやうにしたる者ものが物詣ものもうではいかに。

答こたう、苦くるしからず。

九三、物詣の廻向

ひとつ、物詣ものもうでして経きやうを廻向えきやうすべきに経きやうをば読よまで念仏ねんぶつを廻向えきやうする、苦くるしからず、

と申もうしそうろうは、いかに。

答こたう、苦くるしからず。

九四、殺生

一つ、我がころざさぬ魚は殺生にてはそうらわぬか。
答う、それは殺生ならず。

九五、服薬の数珠

一つ、服薬の数珠は洗いそうらうべきか。

答う、洗い洗わず、苦しからず。

九六、千手・薬師

一つ、千手、薬師は物忌ませたまうと申す、いかに。
答う、さることなし。

九七、六齋に菲
蒜

一つ、六齋に、菲、蒜いかに。

答う、召さざらんはよくそうらう。

九八、齋の食物

一つ、齋の食物は淨くしそうらうべきか。

答う、例の定、行水もそうらうまじ。予ねて精進もそうらうまじ。引入もただの折のにてそうらうべし。齋の誦文も女房はせずとも。ただ念仏を申させた

まえ。さしたる事ありて齋を欠きたらばいつの日にてもせさせたまえ。

九九、三年拌み

一つ、三年拌みの事、しそうらうべきか。

答う、さらずともそうらいなん。

一〇〇、齋の生飯

一つ、齋の生飯には菜を具しそうらうべきか。齋の散飯をば屋の上に打ち上げ
そうらうべきか、土器に取りそうらうべきか。我が引入の皿に取りそうらうべき

か。

答う、いづれも御心。

一〇一、物妬み

一つ、女の物妬む事は罪にてそうろうか。

答う、世世に女となる果報にてことに心憂きことなり。

一〇二、在家の往生

一つ、出家しそうらわねども往生はしそうろうか。

答う、在家ながら往生する人多し。

一〇三、五色の糸切る事

一つ、五色の糸を数多に切りて人に給はんはいかがそうろうべき。

答う、切るべからず。

一〇四、念仏と立腹

一つ、念仏を申しそうろうに腹の立つ心のさまさまにそうろう、いかがしそ

うべき。

答う、散乱の心、よに悪き事にてそうろう。かまえて一心に申させたまえ。

一〇五、有髪

一つ、髪付けながら男女の死にそうろうはいかに。

答う、髪によりそうらわず。ただ念仏と見えたり。

一〇六、五逆程ならず

一つ、尼の、子生み男持つ事は五逆罪程と申す。まことにてそうろうか。

一〇七、三悪道の業

答う、五逆程ならねども重く見えてそうろう。

一つ、尼法師髪を生おす。罪にてそうろうか。

一〇八、經・仏
を売る事

一〇九、人を売
る事

一一〇、爪切と
剃髪

一一一、祭文

一一二、酒の忌

一一三、魚鳥喰
いて沃懸

一一四、読経と
沃懸

答う、三悪道の業にてそうろう。

一つ、經、仏、なんど売りそうろうは罪にてそうろうか。

答う、罪深くそうろう。

一つ、人を売りそうろうも罪にてそうろうか。

答う、それも罪にてそうろう。

一つ、精進の時、爪切らぬと申す、また女に髪剃らせぬと申しそうろう、い

かに。

答う、みな僻事。

一つ、我も人も祭文書く、罪にてそうろうか。

答う、過ぎざらんには何か罪にてそうろうべき。

一つ、酒の忌み七日と申しそうろうはまことにてそうろうか。

答う、さにてそうろう。されども病には許されてそうろう。

一つ、魚鳥喰いては沃懸して經は読みそうろうべきか。

答う、沃懸して読む本体にてそうろう。せで読むは功德と罪とともにそうろう。

ただし沃懸せでも読まぬよりは読むはよくそうろう。

一つ、妻男一つにて經読みそうらわん事、沃懸しそうろうべきか。

一一五、大根、
袖

一一六、落飾の
髪

一一七、紺の衣

一一八、洗髪

一一九、仏を恨
むる事

一二〇、八專の
物詣

答う、これも同じ事。本体は沃懸して読むべくそうろう。念仏はせでも苦し

らす。経は沃懸して読みそうろうべし。毎日に読みそうろうとも。

一つ、大根袖は行に憚と申しそうろうはいかに。

答う、憚なし。

一つ、尼になりたる髪、いかがしそうろうべき。

答う、経の料紙に漉き、もしは仏の中にこそは込めそうらえ。

一つ、尼法師の紺の衣着そうろうはいかに。

答う、世に罪得る事にてそうろう。

一つ、物詣しそうらわんに、男女髪洗い、せめては頂洗うと申しそうろう

はまことそうろうか。

答う、いずれもさる事そうらわす。

一つ、仏を恨むる事はあるまじき事にてそうろうな。

答う、いかさまにも仏を恨むる事なかれ。信ある者は大罪すら滅す、信なき者

は小罪だにも滅せず。我が信のなきことを恥すべし。

一つ、八專に物詣せぬと申すはまことにてそうろうか。

答う、さることそうらわす。いつならんからに仏の耳、聞かせたまわぬ事な

一一一、灸治

じかそうろうべき。

ひとつ、灸治の時物詣せず。その折の着物も捨つると申しそうろうは。

答う、これまた極めたる僻事にてそうろう。ただ灸治を勞りて歩などをせぬ

事にてこそそうらえ。灸治の忌ある事そうらわす。

ひとつ、蒜、舂喰いて三年が内に死にそうらえば、往生せずと申しそうろうはま

ことにてそうろうやらん。

答う、これまた極めたる僻事にてそうろう。臨終に五辛喰いたる者をば寄せず

と申したる事はそうらえども、三年まで忌む事は大方そうらわぬなり。

ひとつ、厄病病みて死ぬる者、子生みて死ぬる者は罪と申しそうろうはいかに。

答う、それも念仏申せば往生しそうろう。

ひとつ、子の孝養、親のするは受けずと申しそうろう、いかに。

答う、僻事なり。

ひとつ、産の忌幾日にてそうろうぞ。また忌も幾日にてそうろうぞ。

答う、仏教には忌という事そうらわす。世間には産は七日、また三十日と申

すげにそうろう。忌も五十日と申す。御心にそうろう。

ひとつ、没後の仏経為置く事は一定すべくそうろうか。

一二三、死因と往生

一二四、子の孝養

一二五、出生の忌

一二六、没後の仏経

一二七、所作の
仕入

一二八、出家の
老若

一二九、花参ら
する誦文

一三〇、忌と物
詣

一三一、精進落
し

一三二、齋の折
の誦文

答う、一定にてせうろう、すべくせうろう。

ひとつ、所作欠きて仕入れ、予ねて欠かんずるをまずしせうろうは、いかに。

答う、仕入るるは苦しからず、予ねては懈怠なり。

ひとつ、出家は若きと老いたるといづれが功德にてせうろう。

答う、老いては功德ばかり得せうろう。若きはなおめでたくせうろう。

ひとつ、仏に花参らする誦文、十波羅蜜往生す、と申してせうろう。御覧のため

に参らせせうろう。

答う、これ詮なし、念仏を申させたまえ。

ひとつ、忌の者の物へ詣りせうろう事は悪くせうろうか。

答う、苦しからず。

ひとつ、物詣して帰りに我がもとへ帰らぬ事は悪し。また魚鳥にやがて乱れそ

うろう事、いかに。

答う、熊野の外は苦しからず。

ひとつ、齋の折の誦文はかくしせうろうべしと申しせうろう。御覧のために参ら

せせうろう。

答う、齋の折もただ念仏を申させたまえ。女房は誦文せずとも。

一三三、女房の
物妬

一三四、桐の灰

一三五、精進三
日

一三六、物籠り

一三七、数珠

一三八、法師の
罪

一三九、現世の
祈り

ひとつ、女房の物妬の事、されば罪深くそうろうな。

答う、ただよくよく一心に念仏を申させたまえ。

ひとつ、桐の灰、髪に付くるは仏神に申す事の叶わぬと申しそうろうはまことに
てそうろうか。

答う、空事なり。

朝で
朝か。
ひとつ、物へ参りそうろう精進、三日という日参りそうろうべきか。四日の早

答う、三日の早朝参る。

ひとつ、物籠りしてそうろうに三日と思ひそうらわんは四日になして出で、七日
と思ひてそうらわんは八日になして出でそうろうべきか。

答う、それは世の人のせんように。

ひとつ、数珠には桜、栗忌むと申しそうろうはいかに。
答う、さる事そうらわらず。

ひとつ、法師の罪は殊に深しと申しそうろうは。

答う、とりわきそうらわらず。

ひとつ、現世を祈りそうろうに験のそうらわぬ人はいかにそうろうぞ。

答う、現世を祈るに験なしと申す事仏の御空事にはそうらわず。我が心の説のごとくせぬによりて験なき事はそうらうなり。さればよくするにはみな験はそうらうなり。観音を念ずるにも一心にすれば験そうらう。もし一心なければ験そうらわず。昔の縁あつき人は定業すらな転ず。昔も今も縁浅き人は塵ばかりの苦しみにだにも験なしと申してそうらうなり。仏を恨み思召すべからず。ただこの世後の世のために仏に仕えんには心を至しまことを励む事、この世も思う事叶い後の世も浄土に生まるる事にてそうらうなり。験なくば我が心を恥ずべし。

一つ、建仁元年十二月十四日、見参に入りて問いまいらする事。

臨終の時、不浄の物のそうらうには仏の迎えに渡らせたまいたるも返らせたまうと申しそうらうは、まことにてそうらうか。

答う、仏の迎えにおわします程にては不浄の物ありというともなじかは返らせたまうべき。仏は浄き穢きの沙汰なし。みなされども観ずれば穢きも浄く、浄きも穢くしなす。ただ念仏ぞよかるべき。浄くとも念仏申さざらんには益なし。万事を捨てて念仏を申すべし。証拠のみ多かり。

一つ、これは御文にて尋ね申す。家の内の者の親しき疎きを嫌わず往生のため

と思おもいて食物着物給くわいぶきものたばんは、仏ほとけに供養くようせんと同じ事おなにてそこうろうか。

答こたう、親おやしき疎うときを簡えらはず往生おうじやうのためと思おぼしめ召まして物給ものたびおわしまさん、めで

たき功德くどくにてそこうろう。御使おんつかいによくよく申もうしそこうらいぬ。

一ひとつ、破戒はかいの僧そう、愚痴ぐちの僧そう、供養くようせんも功德くどくにてそこうろうか。

答こたう、破戒はかいの僧そう、愚痴ぐちの僧そうを末すえの世よには仏ほとけのごことく貴たむべきにてそこうろうなり。

この御使おんつかいに申もうしそこうらいぬ。聞きこし召めしそこうらえ。

一ひとつ、この御おんことは上じやう人の正まさしき御手おんてなり。『阿弥陀経』の裏うらに捺おしたり。

一ひとつ、見参げんざんに入りて承うけたまわる事こと。

毎日まいにちの所作しよきに六万十ろくまんじゅうまん万すへんの数遍ずを数珠ずを繰くりて申もうしそこうらわんと、二万三万にまんさんまんを

数珠ずを確たしかに一ひとつづつ申もうしそこうらわんと、いいずれかよくそこうろうべき。

答こたう、凡夫ぼんぶの習ならい、二万三万にまんさんまん宛あつとも如法によほうには契けい難がたからん。ただ数遍すへんの多おか

らんには過すぐべからず。名号みやうごうを相統さうとつせんためなり。必かならずしも数かずを要ようとするには

あらず。ただ常つねに念仏ねんぶつせんがためなり。数かずを定さだめぬは懈怠けだいの因縁いんねんなれば数遍すへんを勧すす

むるにてそこうろう。

一ひとつ、真言しんごんの阿弥陀あみだの供養法くようほうは正行しやうぎやうにてそこうろうべきか。

答こたう、仏体ぶつたいは一ひとつには似にたれどもその心こころ不同ふたうなり。真言教しんごんぎやうの弥陀みだはこれ己心こしん

一四二、破戒・愚痴の僧

一四三、毎日の所作

一四四、真言の弥陀・浄土の弥陀

の如來、外を尋ぬべからず。この教の弥陀はこれ法蔵比丘の成仏なり。西方に
おわします故にその心大きに異なり。

一つ、常に悪を止め善を作るべき事を思わえて念仏申しそうらわんと、ただ本願を憑むばかりにて念仏を申しそうらわんと、いずれかよくそうろうべき。

答う、魔悪修善は諸仏の通戒なり。しかれども当時の我らはみなそれには背きたる身ともなれば、ただ偏に別意弘願の旨を深く信じて名号を称えさせたまわんに過ぎそうろうまじ。有智無智持戒破戒を嫌わず、阿弥陀仏は来迎したまう事にてそうろうなり。御心得そうらえ。

上人と明遍との問答 第二十三

明遍問いたてまつりてのたまわく「未代悪世の我ら、かようなる罪濁の凡夫、いかにしてか生死を離れそうろうべき」。

上人答えてのたまわく「南無阿弥陀仏と申して極樂を期するばかりこそし得べき事と存じてそうらえ」。

僧都のいわく「それは形のようにさそうろうべきかと存じてそうろう。それにとりて決定をせん料に申しつるんそうろう。それに念仏は申しそうらえども心の

散るをばいかがしそろうべき」。

上人答えていわく「それは源空も力及びそらわらず」。

念仏が第一

僧都のいわく「さてそれをばいかがしそろうべき」。

上人のいわく「散れども名を称すれば仏願力に乗じて往生すべしとこそ心得てそうらえ。ただ詮ずるところ多らかに念仏を申しそろうが第一の事にてそろうなり」。

僧都のいわく「斯うそろう、斯うそろう。これ承りに参りつるそろう」と。これは前後にはいささかも

散心ながら念仏申す

上人また僧都退出の後当座の聖たちに語りてのたまわく「欲界散地に生まれたる者はみな散心あり。譬えば人界の生を受けたる者の目鼻のあるがごとし。散心を捨てて往生せんといわん事、その理しかるべからず。散心ながら念仏申す者が往生すればこそめでたき本願にてはあれ。この僧都の念仏申せども心の散るをばいかがすべきと不審せられつるこそいわれず覚ゆれ」と。

諸人伝説のことは

第二十四
御歌

一向念仏

隆寛律師のいわく、法然上人のたまわく「源空も念仏の外に毎日に『阿弥

但信の称名

三心の月

あわれこの度し
おおせばやな

『陀經』を二巻読みそうらいき。一卷は唐、一卷は呉、一卷は訓なり。しかるをこの『經』に詮ずるところただ念仏申せとこそ説かれてそうらえば、今は一巻も読みそうらわず。一向念仏を申しそうらうなり」と。隆寛りゅうかん 毎日まいにちに『阿弥陀經』すなわち心得て、やがて『阿弥陀經』を開きて念仏三万遍を申しきと。『進行集』より出でたり。云云

乗願上人のいわく、ある人問いていわく「色相観は『觀經』の説なり。たとい称名の行人なりというともこれを観ずべくそうらうか、いかん」。

上人答えてのたまわく「源空も初めはさる徒ごとをしたりき。今はしからず但信の称名なり」と。『授手印決答』より出でたり。

また「人目を飾らずして往生の業を相続すれば自然に三心は具足するなり。譬えば葦の繁き池に十五夜の月の宿りたるは他所にては月宿りたりとも見えねども、よくよく立ち寄りて見れば葦間を分けて宿るなり。妄念の葦は繁けれども三心の月は宿るなり」。これは故上人の常に譬に仰せられし事なりと。かの『二十八問答』より出でたり。

ある時またのたまわく「あわれこの度しおおせばやな」と。その時乗願申さく「上人だにもかように不定げなる仰のそうらわんには、ましてその余の人は

いかかそうろうべき」と。その時上人打ち笑いてのたまわく「蓮台に乗らんま
 ではないかでかこの思は絶えそうろうべき」と。
 『閑亭問答集』より出でたり。

信空上人のいわく、ある時上人のたまわく「浄土の人師多しといえどもみな
 菩提心を勧めて観察を正とす。ただ善導一師のみ菩提心なくして観察をもて称
 名の助業と判ず。当世の人、善導の心によらずは容易く往生を得べからず。曇鸞
 道綽、懷感等、みな相承の人師なりといえども、義においてはいまだ必ずしも一
 準ならず。よくよくこれを分別すべし。この旨を弁えずは往生の難易において存
 知し難きものなり」と。

ある時間いていわく「智慧のもし往生の要事となるべくば、正直に仰を蒙り
 て修学を営むべし。またただ称名不足あるべからずはその旨を存すべくそうろ
 う。ただ今の仰を如来の金言と存すべくそうろう」。

答えていわく「往生の業はこれ称名という事釈文分明なり。有智無智を嫌わ
 ずという事また顯然なり。しかれば往生のためには称名足んぬとす。学問を好
 まんと思わんよりはただ一向念仏して往生を遂ぐべし。弥陀観音勢至に遇いたて
 まつらん時いづれの法文か達せざらん。かの國の莊嚴、昼夜朝暮に甚深の法
 門を説くなり。念仏往生の旨を知らざらん程はこれを学すべし。もしこれを知り

なば幾許ならざる智慧を求めて称名の暇を妨ぐべからず」。

ある時間いていわく「人多く持齋を勧む。この条いかん」。

答えてのたまわく「尼法師の食の作法は最もしかるべしといえども当世は穢すでに衰えたり。食すでに減じたり。この分斉をもて一食せば心偏に食事を思い念仏静かならじ。『菩提心経』にいわく、食菩提を妨げず、心よく菩提を妨ぐといえり。その上は自身をあ計らうべきなり」と。

ある時間いていわく「往生の業においては思い定めおわりぬ。ただし一期の身のありさまをはいかようにか存じそうらうべき」。

答えてのたまわく「僧の作法は大小の戒律あり。しかりといえども末法の僧これに従わず。源空これを誡むれども誰の人かこれに従う。ただ詮ずるところは念仏の相續するようにあい計らうべし。往生のためには念仏すでに正業なり。かるが故にこの旨を守りてあい励むべきなり」。

ある人問いていわく「常に廃悪修善の旨を存じて念仏すると、常に本願の旨を思い念仏すると、いづれか勝れてそうらう」。

答えてのたまわく「廃悪修善はこれ諸仏の通誠なりといえども、当世の我らことごとく違背せり。もし別意の弘願に乗せずは生死を離れ難きものか」。

ある人間ひとといていわく「称名しょうみょうの時心ときこころを仏ほとけの相好そうごうに繋かけん事こといかようにかさうろ
うべき」。

答こたえてのたまわく「しからず。ただ、もし我成われじやうぶつ仏ほとけせんに、十方じつぱうの衆生しゆじやう、我が
名号みやうごうを称しょうすること下十声しもじっしやうに至いたるまで、もし生しやうぜずんば正覚しやうがくを取とらじ。かの仏ほとけ
今現いまげんに世よに在まじまして成じやうぶつ仏ほとけしたまえり。まさに知るべし、本誓ほんぜいの重願じゆうがん虚ひなしからず、
衆生しゆじやう称念しょうねんすれば必ず往生かうじやうすることを得うと思おもうばかりなり。我われらが分ぶん齊さいをもて仏ほとけ
の相好そうごうを觀かんずともさらに如説によせつの觀かんにはあらじ。ただ深ふかく本願ほんがんを憑たのみて、口くちに名
号ごうを稱となる、この一大事いちだじのみ仮令けりやうならざる行ぎやうなり」。

ある人間ひとといていわく「善導ぜんどう、本願ほんがんの文もんを釈しゃくしたまうに、至心ししん信樂しんがく、欲生よくじやう我國こく
安心あんじんを略りやくしたまう事こと、何意なにじこかあるや」。

答こたえてのたまわく「衆生しゆじやう称念しょうねん必得ひつとく往生かうじやうと知しりぬれば自然じねんに三心さんじんを具足ぐそくする故ゆえ
に、この理ことわりを顯あらわさんがために略りやくしたまえるなり」。

ある人間ひとといていわく「毎日まいにちの所作しよさくに六万十万等ろくまんじゅうまんとうの数遍すへんを宛あてて不法ふほうなると、
二万三万にまんさんまんの数遍すへんを宛あてて如法によほうなると、いづれをか正しやうとすべき」。

答こたえてのたまわく「凡夫ぼんぶの習ならい、二万三万にまんさんまんを宛あつというとも如法によほうの義ぎあるべから
ず。ただ数遍すへんの多おほからんにしかず。詮せんずるところ心こころをして相續そうぞくせしめんがためな

り。必ずしも数を沙汰するを要とするにはあらず。ただ常念のためなり。数遍を定めざるは懈怠の因縁なるが故に数遍を勧むるなり」。

ある人問いていわく「上人の御房の申させたまう御念仏は念念ごとに仏の御意にあい契いそうろうらんと覚えそうろう。智者にてましますれば詳しく名号の功德をも知り召し、明らかに本願の様をも御心得あるが故に」と。

答えてのたまわく「汝本願を信ずる事まだしかりけり。弥陀如来の本願の名号は樵、草刈、菜摘、水汲の類ごときの者の、内外ともに欠けて一文不通なるが、称うれば必ず生まるなんど信じて真実に欣樂して常に念仏申すを最上の機とす。

もし智慧をもて生死を離るべくば源空なんぞ聖道門を捨ててこの浄土門に趣くべき。まさに知るべし、聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ、浄土門の修行は愚痴に還りて極樂に生まる」と。
以上信空上人の伝説なり。

念仏申すにはま
 たく様もなし

信空上人またいわく、先師法然上人朝夕教えられし事なり。「念仏申すにはまたく様もなし。ただ申せば極樂へ生まると知りて心を至して申せば参る事なり。ものを知らぬ上に道心もなく、徒に添えなき者のいうことなり。さ云わん口に阿弥陀仏を一念十念にても申せかし」とそうらいし事なり。また御往生の後、三井寺の住心房と申す学生聖に夢の中に問われても「阿弥陀仏はまたく風情も

なくただ申す事なり」と答えられたりと大谷の月忌の導師せらるとて、多くの人のなかで説法にせられそうらいきと。「百川消息」より

出でたり。

弁阿上人のいわく、故上人のたまわく「我はこれ烏帽子も着ざる男なり。十悪の法然房が念仏して往生せんといいて居たるなり。また愚痴の法然房が念仏して往生せんといいなり。安房の介といふ一文不通の陰陽師が申す念仏と、源空が念仏と全く替り目なし」と。「物語集」に

ある時間いていわく「上人の御念仏は智者にてましますは、我らが申す念仏には勝りてぞおわしましそうらんとと思われそうらうは、僻事にてそうらうやらん」。

その時上人御気色悪くなりて仰せられていわく「さばかり申す事をういたまわぬ事よ。もし我れ申す念仏の様風情ありて申しそうらわば、毎日六万遍の勤め虚しくなりて三悪道に墮ちそうらわん。全くさることそうらわす」と正しく御誓言そうらいしかば、それより弁阿はいよいよ念仏の信心を思い定めたりき。

『同集』

また人ごとに上人常にのたまひしは「一丈の堀を越えんと欲わん人は、一丈五尺を越えんと励むべし。往生を期せん人は、決定の信を取りてあい励むべきな

り。ゆるくしては叶うべからず」と。「同集」

また上人のたまわく「念仏往生と申す事は、唐我が朝の諸の智者たちの沙汰し申さるる観念の念仏にもあらず。また学問をして念仏の心を解り通して申す念仏にもあらず。ただ極樂に往生せんがために、南無阿弥陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ひ取りて申す外に別の事なし。ただし三心ぞ四修ぞなんど申す事のせうろは、みな南無阿弥陀仏は決定して往生するぞと思ふ中に撰まれり。ただ南無阿弥陀仏と申せば決定して往生することなりと信じ取るべきなり。念仏を信ぜん人は、たとい一代の御法をよくよく学し究めたる人なりとも、文字一つも知らぬ愚痴鈍根の不覚の身になして、尼入道の無智の輩に我が身を同じくなくして、智者振る舞いせずして、ただ一向に南無阿弥陀仏と申してぞ叶わんずる」と。「同集」

三心も南無阿弥陀仏

また上人のたまわく「源空が目には三心も南無阿弥陀仏、五念も南無阿弥陀仏、四修も南無阿弥陀仏なり」と。「授手印」に出でたり。

三学非器

また上人語りてのたまわく「世の人はみな因縁ありて道心をば発すなり。いゆる父母兄弟に別れ、妻子朋友に離るる等なり。しかるに源空はさせる因縁もなくして法爾法然と道心を発すが故に、師匠名を授けて法然と名づけたまい

しなり。されば出離しゆつりの志こころざし 至りて深かりし間あいだ、諸もろの教法きょうぼうを信じて諸もろの行業ぎやうごうを修す。およそ仏教ぶつぎやう多しといえども詮せんするところ戒定慧かいじやうえの三学さんがくをば過ぎず。い
 わゆる小乗しょうじやうの戒定慧かいじやうえ、大乘だいじやうの戒定慧かいじやうえ、顕教けんぎやうの戒定慧かいじやうえ、密教みつぎやうの戒定慧かいじやうえなり。
 しかるに我がこの身みは戒行かいぎやうにおいて一戒いつかいをも持たず、禪定ぜんじやうにおいて一つもこれを
 得ず、智慧ちえにおいて断惑証果だんかくしやうかの正智しやうちを得ず。これにて戒行かいぎやうの人師にんし釈しやくしていわ
 く、尸羅清淨しらかうじやうならざれば三昧現前さんまいげんぜんせずといえり。また凡夫ぼんぶの心こころは物ものに随したがいて移
 り易やすし。譬たとうるに猿さるのごとし。まことに散乱さんらんして動き易やすく一心静いつしんじずまり難がたし。無漏むろ
 の正智しやうち、何なにによりてか発おこらんや。もし無漏むろの智劍ちけんなくばいかでか悪業煩惱あくごうぼんのうの絆きずな
 を断たたんや。悪業煩惱あくごうぼんのうの絆きずなを断たたずはなんぞ生死繫縛しやうじけいばくの身みを解脱げだつすることを得
 んや。悲かなしきかな、悲かなしきかな。いかがせん、いかがせん。ここに余わがごときは
 すでに戒定慧かいじやうえの三学さんがくの器うつわのものにあらず。この三学さんがくの外ほかに我が心こころに相應そごうする法門ほうもんあ
 りや、我が身みに堪たえたる修行しゆぎやうがあると、万よろずの智者ちしやに求め、諸もろの学者がくものに訪とがいにしに、
 教おしうる人もなく、示しめす倫とらもなし。しかる間あいだ、歎なげき歎なげき経藏きやうぞうに入り悲かなしみ悲かなしみ
 聖教しやうぎやうに向むかいて手てずからみずから披ひきて見みしに、善導ぜんどう和尚しやうの『觀經かんぎやう疏しよ』にい
 わく「一心専念いつしんせんねん弥陀名号みだのみやうごう、行住坐臥ぎやうじゆうざが不問時節ふもんじせつ久近くじん、念念ねんねん不捨ふしや者しや、是名正定ぜみやうしやうじやう
 之業しごう。順彼じゆんび仏願ぶつがん故こ」という文もんを見得みえて後のち、我われらがごときの無智むちの身みは偏ひとえにこの

文を仰ぎ専らこの理を憑みて念念不捨の称名を修して決定往生の業因に備うべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、また厚く弥陀の弘願に順ぜり。順彼仏願故の文、深く神に染み心に留めたるなり。その後恵心の先徳の『往生要集』の文を披くに「往生之業念仏為本」といい、また恵心の『妙行業記』の文を見るに「往生之業念仏為先」といへり。覚超僧都、恵心僧都に問いてのたまわく、汝が所行の念仏は、これ事を行すとやせん、これ理を行すとやせん。と。恵心僧都答えてのたまわく、心万境に遮る。ここをもて我ただ称名を行ずるなり。往生の業には称名最も足れり。これによて一生中の念仏、その数を勤えたるに二十俱胝遍なり、とのたまえり。しかればすなわち源空は大唐の善導和尚の教えに随い、本朝の恵心の先徳の勸に任せて、称名念仏の勤長日六万遍なり。死期ようやく近づくによてまた一万遍を加えて長日七万遍の行者なり」と。『微選拔』に出でたり。

禪勝房のいわく、上人仰せられていわく「今度の生に念仏して来迎に預からん嬉しさよと思ひて、踊躍歡喜の心の発りたらん人は、自然に三心は具足したりと知るべし。念仏申しながら後世を嘆く程の人は三心不具の人なり。もし歡喜する心いまだ発らずは漸漸に喜び習うべし。また念仏の相続せられん人は我三心具

往生の得否

決定往生

罪惡と往生

本願の念仏

したりと知るべし。『念仏問答集』に出でたり。

またいわく「往生の得否は我が心に占え。その占の様は念仏だにも間なく申されば往生は決定と知れ。もし疎相にならば順次の往生は叶うまじと知れ。この占をして我が心を励まし、三心の具すると具せざるとをも知るべし。『同集』。

またいわく「たとい念仏せん者十人あらんが中に九人は臨終悪くて往生せずとも、我一人決定して念仏往生せんと思ふべし。『同集』。

またいわく「自身の罪惡を疑いて往生を不定に思わんは大きな誤なり。さればとてふてかかりて惡からんとはあらず。本願の手広く不思議なる道理を心得んがためなり。されば念仏往生の義を深くも堅くも申さん人はつやつや本願の義を知らざる人と心得べし。源空が身も、檢校別当どもが位にてぞ往生はせんずる、本の法然房にては往生はえせじ。されば年ごろ習い集めたる智慧は往生のためには要にも立つべからず。されども習いたりし甲斐にはかくのごとく知りたればはかりなき事なり。『同集』。

またいわく「本願の念仏には一人立ちをせさせて助をささぬなり。助さす程の人は極樂の辺地に生まる。助と申すは智慧をも助にさし、持戒をも助にさし、道心をも助にさし、慈悲をも助にさすなり。それに善人は善人ながら念仏し、悪人

は悪人ながら念仏して、ただ生まれつきのままにて念仏する人を念仏に助ささぬとは申すなり。さりながらも悪を改めて善人となりて念仏せん人は仏の御意に契うべし。契わぬもの故に、とあらんかかからんと思ひて決定心発らぬ人は往生不定の人なるべし。『同集』

またいわく「法爾道理という事あり。焰は空に上り水は下りさまに流る、菓子の中に酔き物あり甘き物あり。これらはみな法爾道理なり。阿弥陀仏の本願は名号をもて罪悪の衆生を導かんと誓いたまいたれば、ただ一向に念仏だにも申せば仏の来迎は法爾道理にて具わるべきなり。『同集』

またいわく「現世を過ぐべき様は念仏の申されん様に過ぐべし。念仏の妨になりぬべくば、何なりとも万を厭い捨ててこれを止むべし。いわく、聖で申されずは妻を設けて申すべし。妻を設けて申されずは聖にて申すべし。住所にて申されずは流行して申すべし。流行して申されずは家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずは他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずは自力の衣食にて申すべし。一人して申されずは同朋とともに申すべし。共行して申されずは一人籠居して申すべし。衣食住の三は念仏の助業なり。これすなわち自身安穩にして念仏往生を遂げんがためには何事もみな念仏の助業なり。三途へ還るべ

き事ことをする身みをだにも捨て難がたければ、顧かえりみ育はぐくむぞかし。まして往生おつじょう程ほどの大事だいじを
 励はげみて念仏ねんぶつ申もうさん身みをばいかにもいかにも育はぐくみ助たすくべし。もし念仏ねんぶつの助業じょくと思おもわ
 ずして身みを貪とんぐ求ぐするは、三悪道さんあくどうの業ごうとなる。極樂ごくらく往生おつじょうの念仏ねんぶつ申もうさんがために自身じしん
 を貪とんぐ求ぐするは往生おつじょうの助業じょくとなるべきなり。万ばん事じかくのごとし」と。「同おなじ集じきゅう」
 沙弥道しやみどう遍語へんごりていわく、故上こしょう人仰にんおほせられていわく「往生おつじょうのためには念仏第一ねんぶつだいいち
 なり。学問がくもんすべからず。ただし念仏ねんぶつ往生おつじょうを信しんぜん程ほどはこれを学がくすべし」と。
 『宗要集しゅうようじきゅう』に
 出いでたり。

御歌

阿弥陀仏あみだぶつというより外ほかは津つの国くにの難波なにわの事こともあしかりぬへし
 千歳ちとせ経ふる古松こまつの下もとをすみかにて阿弥陀仏あみだぶつの迎むかえをぞ待まつ
 池いけの水人みずびとの心こころに似にたりけり濁にごり澄すむ事こと定めなければ
 生むまれてはまず思おもい出でん古里ふるさとに契ちぎりし朋ともの深ふかきまことを
 阿弥陀仏あみだぶつと申もうすばかりを勤つとめにて浄じょうど土つちの莊しょうごん厳げん見るぞ嬉うれしき
 柴しばの戸とに明あけ暮くれ掛かかる白雲しろくもをいつ紫むらさきの色いろとみなさん
 露つゆの身みは此こ彼かにて消きえぬとも心こころは同おなじ華はなの台うてなぞ

あみだぶつとこえとな
阿弥陀仏と十声称えて眠まん永き眠りになりもこそすれ
つきかげいた
月影の至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ
くろだにしようにんごとうろくかんだいじゅうご
黒谷上人語灯録卷第十五

